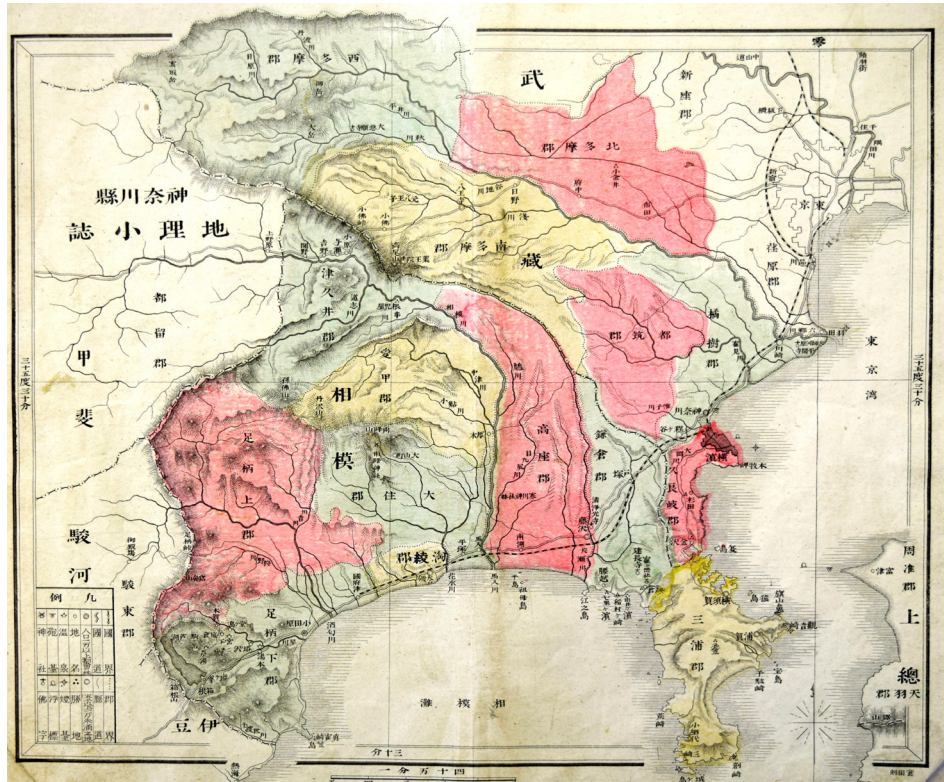


東京都三多摩公立博物館協議会会報

# ミュージアム多摩

## No.40

～特集 明治150年～



神奈川県地理小誌 (明治20年刊行) 清瀬市郷土博物館所蔵

2019.3

東京都三多摩公立博物館協議会



## 目次

【特集】明治150年	2
●江戸東京たてももの園の「東京150年」	
江戸東京たてももの園 阿部 由紀洋	2
●明治の村絵図を読み解く	
小金井市文化財センター 多田 哲	4
●企画展示「明治時代の東大和」	
東大和市立郷土博物館 阿見 優貴	8
●明治150年関連企画展「明治期の調布 - 教育・産業・戦争」の開催について	
調布市郷土博物館 芝崎 由利子	10
会員館活動報告(順不同)	12
府中市郷土の森博物館・帝京大学総合博物館・たましん地域文化財団・瑞穂町郷土資料館けやき館・狛江市立古民家園(むいから民家園)・集合住宅歴史館・奥多摩水と緑のふれあい館・江戸東京たてももの園・あきる野市五日市郷土館・小金井市教育委員会(小金井市文化財センター)・東京都埋蔵文化財センター・東村山ふるさと歴史館・羽村市郷土博物館・武蔵野ふるさと歴史館・八王子市郷土博物館・青梅市郷土博物館・檜原村郷土資料館・立川市歴史民俗資料館・コニカミノルタサイエンスドーム八王子子ども科学館・首都大学東京91年館・福生市郷土資料室・くにたち郷土文化館・清瀬市郷土博物館・国際基督教大学湯浅八郎記念館・調布市郷土博物館・日野市郷土資料館・多摩六都科学館・武蔵村山市立歴史民俗資料館・町田市民文学館ことばらんど・パルテノン多摩歴史ミュージアム	
東京都三多摩公立博物館協議会 会員名簿	32

# 江戸東京たてもの園の「東京150年」

江戸東京たてもの園 学芸員 阿部 由紀洋

## はじめに

2018年(平成30)、東京都は江戸から東京への改称、そして東京府開設から150年の節目であることを記念し、「Old meets New 東京150年」と銘打ち、イベントや関連事業などを実施するとともに、都庁内各局や区市町村の既存事業・イベント等と連携し、多彩な取組を実施しました。当園で開催の特別展も「東京150年」の名を冠し、「看板建築展」(会期:3月20日(火)から7月8日(日))と「東京150年展—都市とたてもの、ひと」(会期7月24日(火)から平成31年1月20日(日))を開催しました。このほか、「東京150年」PR用ポスター11種類をパネル化し、当園のメインエントランスである「ビジターセンター(旧光華殿)」から屋外展示へと通じる廊下の両壁面に展示をしました。本稿では、2つの展覧会について紹介します。



地のほとんどが焼失しました。第1章では焼け野原と化した東京について、絵画資料や写真、被災物や被災地図などから紹介しました。地図については、「帝都大震災火災系統地図」という、焼失地域や火の流れなどを記したものをパネル化し、間近で見られるようにしました。続く第2章では、震災後の人びとの仮の住まい、いわゆる「バラック」の様子を、考現学の創始者で建築家でもあった今和次郎によるスケッチや今和次郎も関わった「バラック装飾社」の活動の様子、そして資生堂やほかの商店の仮の店舗を撮影した写真などから紹介しました。なかでも資生堂については、仮の店舗の外観を描いた水彩画を展示し、いろどりを加えることができました。「バラック装飾社」の活動や繁華街の商店の仮設店舗が、看板建築の誕生に大きな影響を与えたことを紹介し、それを受けて第3章を「看板建築の誕生」とし、その特徴を模型などを使って紹介しました。



## 東京150年記念「看板建築展」

当園には現在、武居三省堂(文具店)、花市生花店、丸二商店(荒物屋)、植村邸、村上精華堂、大和屋本店(乾物屋)の6棟の「看板建築」を移築し、保存・公開しています。1993年(平成5)の開園から25年、これらの看板建築をテーマにした展覧会の開催は当園でも初めてであり、おそらくは国内でも初の展覧会となったと思われます。

展覧会で紹介した「看板建築」は、その多くが1923年(大正12)に発生した関東大震災後に建てられた、木造の商店建築です。「看板建築」という名称は当初からのものではなく、1975年(昭和50)開催の日本建築学会大会で発表された「看板建築の概念について」(発表者は藤森照信氏 現江戸東京博物館館長)に端を発します。そこで同展では、看板建築の名称の誕生について「看板建築の「発見」」と題し、プロローグとしました。

関東大震災は、地震の発生が昼時であったことから市内各所で火災が発生、折からの強風にあおられて瞬間に被害は拡大し、9月3日の午前中まで燃え続けました。「大震災」とも呼ばれた地震と火災により東京は壊滅的な被害を受け、日本橋区や浅草区、本所・神田・京橋・深川の各区(現在の中央区や台東、墨田、千代田、江東各区の一部)では、市街

建築関係の展覧会では、建築当初の図面や写真類が多きを占めますが、看板建築に関しては建築当初の図面、といったものはほとんどありません。展示資料には非常に苦慮しましたが、幸い、移築復元時に製作したり過去の展覧会で製作した模型があり、それらを活用することで看板建築の特徴をわかりやすく伝えることができました。加えて、少ないながらも看板建築の所有者が保管する資料を拝借し展示したのですが、なかでも建物のデザインを知り合いの画家に依頼したというお宅には、彩色された図面や、完成までの経過が見取れる複数の図面が保管されており、施主とのやりとりが見



て取れる興味深い資料を展示しました。また、大地震が発生した時の手記なども保管されており、展示に深みを出すことができました。

このほか、同展で注目を集めたのが、看板建築の残存状況を一覧にしたパネルでした。当園には開園に先立ち、収蔵候補として調査された建物のデータが保管されていますが、それから25年以上経過した今、看板建築がどれほど残っているのかを、地図サイトなどで確認し一覧にしたものです。都内のおもな場所に限ったものでしたが、それでもかなりの件数を一覧にしており、幅1,800mm、高さ1,300mmのパネルに詰め込まれたデータを熱心にご覧になっている方が多く見られました。

「看板建築展」は看板建築を紹介する本邦初の展覧会であり、近年、急速に姿を消しつつある建物に改めて光を与えるきっかけとなりました。そして、その看板建築に興味を持ち同展に足を運んでくださった方々に、看板建築の魅力を伝えることができたと考えています。

### 「東京150年—都市とたてもの、ひと」展

看板建築展に引き続き開催された同展は、当園の本館にあたる江戸東京博物館での企画展「東京150年展」（平成30年8月7日（火）から10月8日（月・祝））との連動企画として開催しました。本館の企画展では、東京の都市計画、街づくりの変遷を紹介するものであったのに対し、当園ではそのタイトルのおおりの、1868年（明治元）に建てられた築地ホテル館から2016年（平成28）に開館したすみだ北斎美術館まで、東京150年の様々な建築と、そこに暮らした人びとの様子などを紹介しました。建築展では見過ごされがちな「人びとの暮らし」という視点を加えることで、来園者の多様なニーズにこたえる展覧会となりました。

本展は「洋風建築がやってきた」というところから始まりま



す。長く閉ざされた時代に決別し、海の向こうへと門戸を開いた明治の日本。流れ込む西洋の文化は瞬く間に日本を席卷し、建築の世界でも、大工棟梁による明治初期の過渡期的な「擬洋風建築」が姿を現しました。その後、日本に招かれた多くの外国人技師や建築家により本格的な西洋建築が建設され、当時の人々の注目を集めました。中でも1877年（明治10）に来日した英国人建築家ジョサイア・コンドル（1852—1920）は、自身でも多くの作品を世に送り出した一方、工部大学校造家学科（現在の東京大学建築学科）で教鞭をふるい、辰野金吾（1854—1919）をはじめとする多くの日本人建築家を育てました。彼らの華々しい活躍により、江戸以来の街並みは



少しずつ変化していきました。そして、そこに住む人びとの中にも今までの暮らしぶりを見直す動きが広がり、家族の団欒、住みよさに目を向けた住宅が誕生しました。さらに、街には百貨店や劇場などが次々と誕生するなど、建築は様々な展開を見せました。

しかし、華やかな街並みを一瞬にして消し去ってしまったのが、1923年（大正12）の関東大震災でした。この大災害をきっかけに、未だ江戸の風情を残した街並みは消え、火災に強い近代的な街並みが形作られていきました。建物も鉄筋コンクリート造へと生まれ変わり、そこには様々な様式を身につけた建築家たちにより、以前よりさらに多彩さを増しました。ところが、震災発生からわずか20年ほどで東京は再び焼け野原と化してしまいました。その後、物資が乏しい中での再出発でしたが、東京オリンピックの会場として建てられた国立代々木屋内総合競技場など、世界が注目する建築が誕生しました。そして現在、東京には最新の建物が日々建てられ、中には外国人建築家による作品も誕生し、世界が注目する都市となりました。

建築の展覧会は、前述したように主に図面や建築部材、模型などのほかグラフィックパネルを駆使して構成することが多いです。本展もそうでしたが、それに加え建物の様子を伝える動画や、前述のように生活道具類、主に家庭用の電化製品なども交えることによって、建物や都市の歴史の流れに人の営みを加えることに努めました。本展では、東京の150年を「つくり手と使い手の成熟と相互作用、そして地震国の宿命への挑戦の系図であったといえるかもしれない」とし、最後に「21世紀の建築表現」として最新の事例を模型で紹介、それぞれの建物に「22世紀の東京」を予見する鍵があるとして締めくくりとしました。

### おわりに

「東京150年」を記念して開催された2つの展覧会は、いずれも都市東京の150年の歴史の中で、建物が果たしてきた役割に注目したものであり、同時にその歴史の中に生きた人びとと建物との関わりをも紹介したものでした。特に「看板建築」は、災害の教訓や限られた敷地への対応、そして施主のこだわりや想いを形にしたデザインなど、建物と人との関係が濃密です。両展の開催を通じて、建物の意匠や技術のみならず、そこに関わった様々な人びとの想いをも伝えられたと思います。そして展示室を出た後に園内30棟の実物に触れることで、展覧会のねらいをより深く体感していただけたものと思います。

# 明治の村絵図を読み解く

小金井市文化財センター 多田 哲

平成30年度は「明治150年」のみならず、小金井市では市制施行60周年に当たる節目の年であり、当館では記念展示として企画展「小金井の絵図」を平成30年11月1日(水)から12月24日(日)まで開催しました。これまで当館に所蔵はしていたものの、余りにも大きすぎて展示できなかつた地租改正前後の村絵図3点を裏打ち修復し、ほぼ原寸大のターポリン生地に複製した絵図を、現代人にも分かりやすいように北を上にして展示しました。複製元の絵図は、いずれも市内の旧名家から寄贈された以下の3点です。

- ① 小金井村絵図 明治2年(1869)
- ② 貫井村全図 坂上 明治8年(1875)
- ③ 貫井村全図 坂下 明治8年(1875)

こうした明治初頭の絵図成立の背景や租税徴収との関連については、これら村絵図の修復記念講演会「古絵図でたどる小金井の幕末明治」に譲り、当館では市民の基本的な関心事である「この絵図に示されているこの場所はどこなのか?」に焦点を絞って展示しました。3つの絵図は、いずれも明治22年の町村制施行以前のもので、現在の小金井市域全体をカバーすることはできませんが、既存の古文書や地形図に見られない情報が含まれています。3つの絵図を読み解くにあたって、まず、頭に入れておかなければならない大前提となる基礎知識から述べていきます。

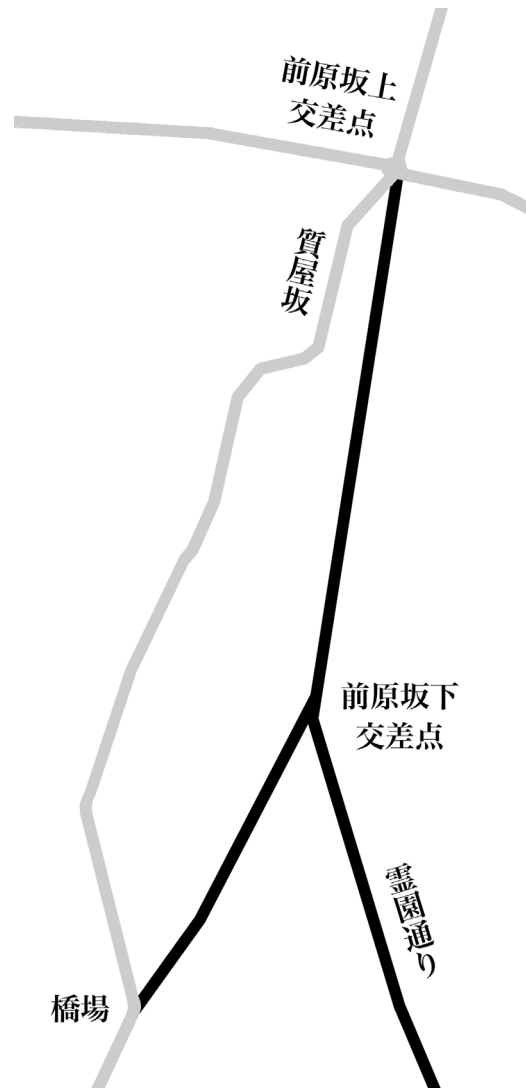
## ■小金井街道の昭和に新設した部分(図A)

①は地租改正前に、フリーハンドで描かれた絵図です。赤道沿いに、姓を略した村人の名が細かく記入された江戸期さながらの絵図で、現代人の眼からすれば分かりづらいことこの上もありません。しかし何といても、一般市民の理解の妨げになっているのは、幹線道路である小金井街道が現在とは全く異なる状態にあることです。

小金井街道と現在の連雀通りが交わる前原坂上交差点は、元々、「小金井六道の辻」と呼ばれた六叉路で、大正15年に武蔵小金井駅が正式開業する以前から、人力車の停車場であった交通の要衝でした。前原坂上交差点から前原坂下交差点までの陸橋と、前原坂下交差点から現在、前原小入口と呼ばれている「橋場」までの小金井街道は、昭和2年11月23日の起工式を皮切りに敷設工事を行い、翌昭和3年に完成したものです。この期間、同時に前原坂下交差点から霊園裏門までの霊園通りの敷設工事をして、武蔵小金井駅は多磨墓地(昭和10年、多磨霊園に改称)の最寄り駅としての地位を確立しました。現在、陸橋になっている土地は、その殆どが築造当時の村長星野治亮の所有地で、村長自ら用地提供をして小金井街道を新設しました。小金井尋常高等小学校の訓導らが編纂し、昭和9年に発行した『小金井村郷土誌』には、「多磨墓地道路開鑿の際 縄文土器多数発掘。内一個信用組合長星

野治亮氏より小学校へ寄贈。」とあることから、工事の際に多数の出土物があったことは間違いないでしょう。

新設した小金井街道は、小金井の昭和の歴史そのものと言っても過言ではないのですが、分かりづらいのは、橋場から南の府中方面に向かう小金井街道は既にあったことです。現在の橋場では、昭和初頭に敷設した小金井街道と、少なくとも江戸期からはあった小金井街道が、余りにも滑らかに繋がっています。そのため、あたかも始めからこのような状態であったと錯覚して、明治の陸測図を読み違えている方も多そうです。更には、陸橋のどこにも築造年を刻んでおらず、昭和になるまでは、旧小金井街道とも表現される質屋坂通りを下って府中に向かったことさえ、忘れ去られているのが現状です。



A. 昭和7年発行『小金井村全図』を元に作図



B. ①を元に作図

### ■陸軍技術研究所による旧道の破壊と水路の改変

②と③は地租改正後に、測量を元に描かれた絵図で、添書きには村用掛や代議人の姓が記入されています。②と③の境界は貫井村の本村と新田ではなく、小字界で坂上と坂下を分けています。③の貫井村坂下は、現在の池の上通りなど旧道がそのまま残っていますので、読み解くのはさほど難しくありませんが、問題は②の貫井村坂上です。

現在の小金井市域の北西部は、昭和15・17年に陸軍技術研究所が強制買収により移転してきたことにより、少なくとも江戸期からはあった旧道が破壊され、碁盤のマス目状の道路に改変されました。現在、技研が敷設した学芸大敷地内の東西の道路は、新小金井街道を越えてナンジャモンジャ通りと呼ばれている市街地の道路に繋がっていますが、技研通りとでも名付けた方がむしろ妥当で、市民は戦争遺跡という意識もなく日常的に歩いています。貫井村の南北を縦断していた旧道は、貫井北では途切れ途切れに名残をとどめるのみで、昭和戦前でさえ地理的状况を説明することは困難になっています。

更に技研は道路だけではなく、小金井のはげ上に人が住めるようになった大元である小金井分水の流路さえ、勝手に改変しています。現在、一中の西側に残る直角に曲がる水路がそれで、これもまた戦争遺跡といえるでしょう。

以上、二つの基礎知識を踏まえて、3つの絵図から読み取れる若干のトピックを書き連ねてみます。

### ■謎の除地は元天満宮遺跡か？(図B)

①には現在の連雀通り沿いに、かなり大きく除地が描かれています。ちょうど中山谷遺跡の範囲に被り、現在、鈴木モーターズがあるあたりです。この除地については、筆者の知る限り古文書に記述が無く、なぜここが免税地であったのか謎です。ただし、全く手がかりが無いわけではなく、大正7年頃、小金井神社の社掌星野甲子三郎が著した『小金井神社略縁起』によれば、はげ上にあった小金井神社(菅原神社)の元社地であった可能性が考えられます。

「元久二年武蔵野開拓ノ当時里人菅原道真公ノ鴻徳ヲ敬仰シ地ヲ桜並ニトシ(桜並俗ニ天神面ト称シ今ニ遺跡ヲ伝フ) 此処ニ社殿ヲ造リ神霊ヲ奉祀シ天満宮ト称ス(往昔別当金蔵院火ヲ失シ挙ゲテ旧記ヲ亡ヒ縁起ノ考フベキナシ古老ノ口碑ニ拠ル)」

この一文はそっくり『小金井村郷土誌』にも孫引きされていますが、同書には「桜並」について、「俗称天神面 元天満宮遺跡と伝ふ。」とあり、土器・石器・宋銭が出土したとしています。こうした『小金井神社略縁起』や『小金井村郷土誌』にある記述は、戦前の小金井では村の共通認識だった可能性が高く、この小金井神社があった「桜並」は、小字名として戦後まで残り、この謎の除地があった場所は、正にその小字「桜並」の範囲に含まれます。また「天神面」について『小金井市誌Ⅴ 地名編』では、「天神免」の意で「神社の除地であったかも知れない」としています。あるいは「天神面」の「面」は、国分寺崖線の面とも受け取れますが、いずれにせよ「古老ノ口碑ニ拠ル」ものなので、確定的な証拠はありません。

■現存しない鴨下家墓地 (図B)

①に記入されている家墓・屋敷墓と呼ばれる代々の地元一族の墓地は、現在でも場所が変わっていないので、絵図上の位置を特定するのに役立ち、その中には現在は存在しない墓地もあります。

現在、はげの森美術館からはげの道を東に向かうと、大岡昇平『武蔵野夫人』冒頭にでてくる荻野長作家のモデルとなった屋号「はげ」の渡辺家があります。絵図上に「安右衛門」と記入されているのが渡辺家で、その東の坂を挟んで「墓」と記入されている場所があります。この土地は元々、はげの森美術館西隣の鴨下家の所有地で、長らく竹藪でしたが、最近、分譲住宅になりました。

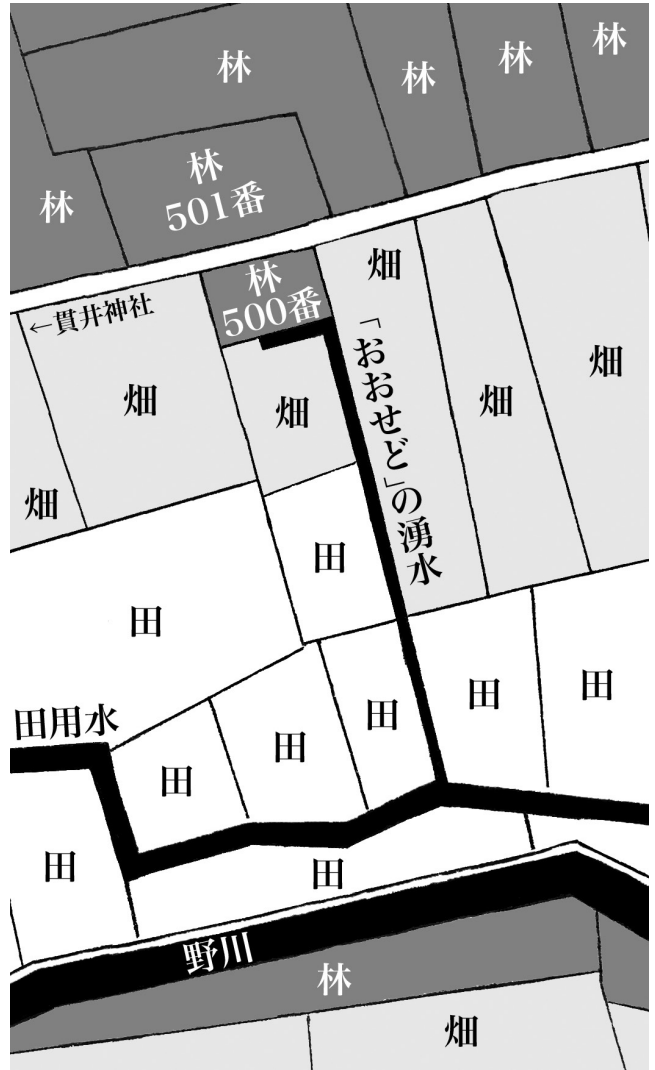
この鴨下家の墓は、小金井小次郎の墓がある鴨下・関家墓地には無く、二中北側の真陵墓地にあります。代々の地元民である鈴木源次氏によれば、この鴨下家の墓は初めから真陵墓地にあったのではなく、「はげ」の渡辺家の東側の竹藪にあったのを、明治期に真陵墓地に移設したと親から伝え聞いているそうです。この証言が正しいとすれば、①が描かれた明治2年以降に移設されたことになります。これもまた、証拠となる文書が存在しませんが、絵図から得られる情報と地元民の伝承が合致した好例でしょう。

■「おおせど」の湧水 (図C)

貫井神社からはげの道を東に200mほど行ったあたりは、かつて鬱蒼とした杉林で通称「おおせど」と呼ばれていました。ここには湧水があり、小さな滝を成して田用水に流れ込み、田用水は大正12年の貫井プール建造後、その排水路としても使用されました。

この湧水について、これまで地図上に記載があったのは、昭和14年に発行された『小金井町土地宝典』だけでした。今回、修復した③には、『小金井町土地宝典』と全く同様にこの湧水が描き込まれていましたが、土地の使用用途別に塗り分けられているのが特徴です。はげの道北側の杉林だった土地は、「林」を示す緑色で塗られており、道を挟んだ南側は「畑」を示す橙色で塗られていますが、ただ一つ、L字型水路の北側、500番地だけが緑色で塗られている「林」です。おそらく、水気が多すぎて耕作地にできなかったのでしょう。

ところで、この絵図から得られる情報だけでは、湧水の水源地が500番地のように思えてきます。しかし、実際は500番地からはげの道を挟んだ北側のおそらく501番地に湧水源地があり、大正時代、「おおせど」付近のはげの道北側は、三楽荘(前田別荘)の敷地でした。この湧水について三楽荘初代前田武四郎は、自らも会員であった武蔵野会の会報『武蔵野』に大正11年12月に寄稿した一文「貫井は昔し温井と書いた理由」に、「小生地内湧水」と記しています。更に武四郎の娘婿前田暎が残した手描きの地図には、はげの道北側の三楽荘敷地内に水源地を記入しています。三楽荘造成に伴う出土物は、貫井遺跡の発掘調査の原点ともいえますが、その水源地については、これまで貫井神社の湧水のみが着目されてきました。失われた「おおせど」の湧水の古代史における重要性は、今後、再発見されることとなるでしょう。



C. ③を元に作図

■貫井村稲穂神社・八雲神社

②には、明治33年、貫井村総鎮守貫井神社に合祀された無格社の社地が記入されています。例えば、現在の貫井トンネル付近は六叉路「貫井六道の辻」でしたが、その六道のひとつ、「なそい坂」を上った552番地には貫井村の稲穂神社がありました。この稲穂神社は、現存する小金井村の稲穂神社(本町5丁目)とは別の神社です。

また、現在の公務員住宅4・5号棟付近である889番地にあった八雲神社も記載されています。ただし、昭和に入って技研が撤去を命じるまで、八雲神社の小さなお社はそのまま残っていたと地元民が証言しています。合祀後も、おそらく地元民はその社殿を拜んでいたのではないのでしょうか。画一的な神社合祀政策では、「天王さま」の俗称で親しまれた八雲神社に対する地元の信仰は、簡単に変えることができなかったのでしょう。技研買収後、社殿も貫井神社に移され、今でも貫井神社境内に安置されています。

貫井村稲穂神社と八雲神社は、番地の記録が既にあったので場所は分かっていましたが、地図上の記載は今回修復した②が初めてです。



### ■下弁天(元弁天)

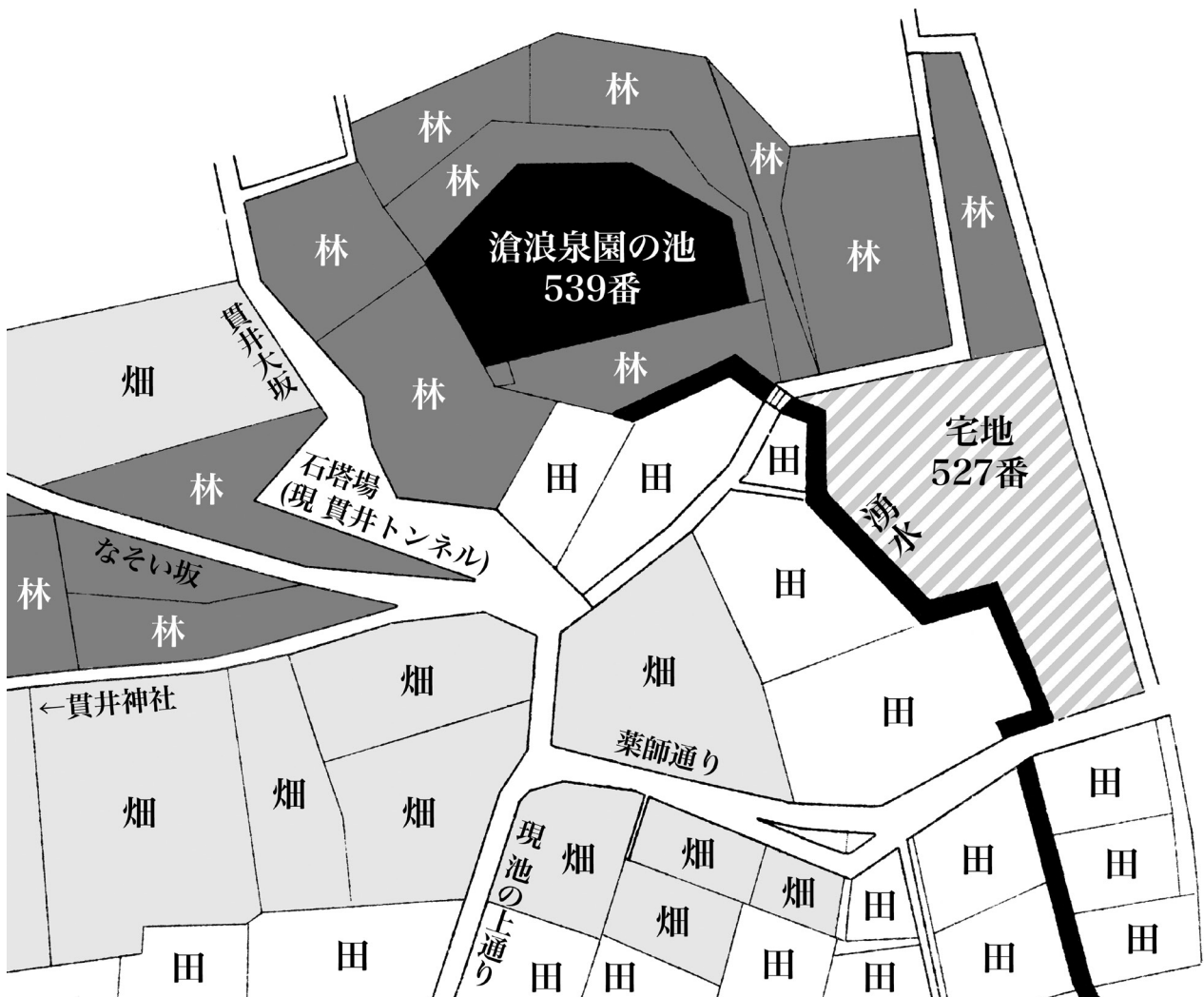
貫井神社の元社地とされる下弁天は、これも同様に明治33年、貫井神社に合祀されています。③には勿論、下弁天の記載がありますが、これほど詳細に描き込まれた地図を見たことがありません。野川がほぼ直角に曲がるところに瓢箪池があるまでは同じですが、その池に浮かぶ島のような社地まで、克明に描かれています。野川の水が池に流れ込んでいただけではなく、この池自体からも水が湧いていましたが、昭和30年代に枯れてしまいました。鮒釣りの名所として親しまれた往時を偲ばせる絵図です。

### ■滄浪泉園の池(図D)

現在、市民に親しまれている滄浪泉園の池は、地図上に記載が少なく、その殆どが池の南の湧水路から描き込まれています。勿論、大正期に波多野承五郎が別荘を造成する以前から池はあったのですが、③の修復により初めて地図上で確認できました。ただし、③のこのあたり「貫井六道の辻」付近は虫損が甚だしいため、図Dは昭和14年発行『小金井町土地宝典』を下図にして、③の明治8年の土地使用用途を記入してみました。

特に驚かされたのは池よりも、池の南側に黄色で塗り分けられた田圃が迫っていることです。野川沿いから薬師通りを越えて、はけの斜面にまで田圃が連なっていますが、傾斜地に田圃をつくることは容易でなかった筈です。そこで、改めて『小金井町土地宝典』を見てみると、同様に現在、貫井トンネルになっている石塔場の東隣の土地まで田圃でした。これまで見過ごしていましたが、③が塗り分けられているからこそ、初めて気がついた発見です。なお、527番地の宅地は、湧水を使って水車を稼働させていた鈴木家で、水車は通称「弁車(べんぐるま)」と呼ばれていました。

以上、思いつくままに、3つの絵図の注目すべき点の具体例を挙げてみました。ここに〇〇家の墓地がある、ここで水が湧いているなど、当時、当たり前のことは中々文書に残りません。地図や絵図は文書だけを読んでいたのでは気がつかない、村人たちが普段目の当たりにしてきた風景を再現するための格好の素材といえるでしょう。



D. ③を元に作図

# 企画展示「明治時代の東大和」

東大和市立郷土博物館 阿美 優貴

## はじめに

今年度は、明治元年から起算して150年という大きな節目にあたり、全国的に記念事業が展開されました。

その中で、当館では、社会が大きく変革した明治という時代における東大和のできごとや暮らしをテーマに、企画展示「明治時代の東大和」を9月15日から10月21日まで開催しました。

## 展示内容

本展の構成としては、年表、幕末（農兵）、地図と人口、行政、徴兵制度、教育、自由民権運動、経済、郵便制度、養蚕、絣織の11のコーナーに分けて行いました。

教育の展示では、明治初期に使用されていた教科書や卒業証書を展示しました。

また、今回は雲性寺からお借りした明治14（1881）年の境内絵図を展示しました。この境内絵図には、当時の奈良橋学校が描かれています。東大和には学制発布時に、小禎学舎（芋窪村）、汎衆学舎（葎敷村）、巖玉学舎（奈良橋村）、竭力学舎（高木・後ヶ谷村）、研精学舎（清水・宅部村）の5つの小学校が設立されました。奈良橋学校はこの内の巖玉学舎が明治9（1876）年に改称したものです。博物館では初めての公開となる絵図を、皆さんとても熱心に見学されていました。

絣織の展示では、所沢飛白勉強会のご協力で、絣織の準備作業や復元した高機を使っての絣織の様子を公開しました。

今回は「物」だけでなく、「人」が実際に作業しているところをお見せすることで、絣織とはどのようなものか、理解を深めてもらうことがねらいでした。

その他、各コーナーの主な展示資料については以下の通りです。

- ①年表
- ②幕末（農兵） 銃、葎山笠、農兵訓練の朶、軍用金請取覚書 他
- ③地図と人口 迅速図、北多摩総図 他
- ④行政 地券、山林原野雑種地地租追納帳、奈良橋戸長役場の看板、高木村外五ヶ村組合村長の印、村長収入役事務引継書綴、組合役場処務規程、高木村外五ヶ村組合戸籍吏の判 他
- ⑤徴兵制度 従軍徽章、徴兵之義説論 他
- ⑥教育 教科書、掛図、輿地史略、石板、卒業証書、第三村山尋常小学校集合写真、雲性寺境内図 他
- ⑦自由民権運動 衆楽会開場祝辞、衆楽会開講式の記録、五日市憲法草案、倭約簡法保険要録カバー、書簡（明治14年9月15日）、書簡（明治14年5月15日）、書簡（葉書） 他
- ⑧経済 第三回内国博覧会褒状、太政官札、明治通宝、西郷札、旧貨幣（レプリカ） 他
- ⑨郵便制度 開函帳、神奈川県下武蔵国北多摩郡小川郵便局所轄、小川郵便局所轄郵便切手売下所及函場取

## 調査 他

- ⑩養蚕 東京府蚕病予防事務所の書類、蚕糸業組合証票渡人名簿、組合員章、飛白織立通帳、養蚕証票 他



企画展示「明治時代の東大和」展示の様子



絣織の準備作業の様子

- ⑪絣織 高機、座繰り、糸車、ハタクサ 他

## 五日市憲法草案（原本）の展示

五日市憲法草案とは、明治14（1881）年頃、千葉卓三郎らによって起草された憲法私案で、全204条のうち150条を国民の権利保護にあてています。具体的には、国民の自由権を国法が保護する、国民の平等、子弟の教育は父兄の責任で教育の内容は教える側の自由であること、地方自治を認め、国会の天皇に対する優越を明確にし、政治犯の死刑を否定する、などです。国民の自由権にここまで焦点をあてた憲法草案は当時、他の国には無かったのではないかとわれています。

五日市憲法を起草した千葉卓三郎は、嘉永5（1852）年6月17日に陸前国栗原郡白幡村に生まれ、17歳の時に戊辰戦争に従軍しました。その後、東京・五日市の観能学校教師となり、五日市学芸講談会の青年民権家らと熱心な討論を重ね、五日市憲法草案の起草という偉業を成し遂げました。卓三郎は明治14年7月～9月頃に東大和の鎌田家に寄宿してい



五日市憲法顕彰碑（宮城県栗原市 志波姫支所）  
志波姫、資福寺、五日市の三か所とも碑文の内容は同じ。

ます。

卓三郎が当時の大和村の人々に影響を与えたことを広く知ってもらいたいという想いがあり、今回は深澤篤彦氏やあきる野市教育委員会の皆様にご協力いただき草案をお借りすることとなりました。

まず、五日市憲法草案は、全204条のうち、五日市憲法草案顕彰碑に刻まれている第45条、48条、76条、77条、86条、194条の部分を9月21日から24日まで期間限定で展示しました。

また、五日市憲法草案の他にも、千葉卓三郎がどのような人物であったか理解を深めるために、書簡なども併せて展示しました。これらの史料は、東大和では初の展示となります。

千葉卓三郎が五日市の深澤権八に宛てた書簡には、私用で五日市に戻れない間の授業の進め方について連絡しています。深澤権八は当時、学芸講談会の幹事をしており、父・名主（なおまる）とともに卓三郎と縁の深い人物です。

もう一つは、北多摩郡奈良橋村に滞在中の千葉卓三郎が深澤名主・権八親子に宛てた書簡です。大会の感想や小学校教員が准官吏となった時は辞職するつもりだが、何か心当たりがあれば一筆欲しいという旨が書かれています。

4日間という短い展示期間でしたが、千葉卓三郎と東大和の関係を知ってもらう貴重な機会となりました。

#### 関連講演会と朗読劇

関連イベントとして、9月24日（祝日）に市民大学朗読劇の会による朗読劇、新井勝紘氏による講演会を中央公民館ホールで開催しました。

市民大学朗読劇の会は、公民館の平成29年度市民大学グリーンカレッジ「五日市憲法を学び朗読劇をしよう～東大和と自由民権運動」で学んだ有志が結成した会です。公民館まつりでは朗読劇「五日市憲法草案は謳う」を上演し、自由民権運動について学んだことを朗読劇にして発表してきました。

今回は内容を変更し、東大和の自由民権運動とそれを支えたひとたちをテーマに上演していただきました。

物語は、明治時代の小学校「昇隆学校」の生徒たちが衆楽会の発会式へ参加するために蓮華寺へ向かうところから始まります。三多摩の自由民権運動では56の結社が誕生しています

が、その最初のスタートを切ったのが、東大和のこの衆楽会でした。

朗読劇を通して、東大和でも自由民権運動が盛んだったということを知った方も多いのではないでしょうか。

後半は、新井氏に「東大和の自由民権運動と千葉卓三郎～五日市憲法発見50年をふりかえって～」という講演をしていただきました。

新井氏は、色川大吉教授のもとで、日本近代史や自由民権運動史について研究され、現在は高麗博物館館長としてご活躍されています。また、東大和市史編集委員としてもご協力いただきました。

深澤家の土蔵で五日市憲法草案を発見したときの様子を改めて振り返り、さらに今回は、東大和と五日市憲法草案の関係について深く掘り下げてお話しいただきました。なぜ、千葉卓三郎が東大和へやって来たのか、はっきりした理由はわかっていません。しかし、卓三郎が東大和の自由民権運動にとって重要な役割を果たしたことを認識できたのかもしれない。



千葉卓三郎になりきり羽織姿で講演をされている新井氏

#### おわりに

「出生が東大和市ではないので初めて知ることばかりでした。明治という時代で区切った東大和の歴史を大変意欲的に扱った企画で感心しました。」「改めて東大和市が好きになった。」など、東大和市をもともと知っている方やそうでない方にもたくさんの有り難い感想をいただきました。

最後になりましたが、本展の成功のためにご協力頂いた新井勝紘氏、市民大学朗読劇の会の皆様、草案を貸していただいた深澤篤彦氏、あきる野市教育委員会の皆様には、感謝御礼申し上げます。

今回の試みが、東大和の歴史を知るきっかけとなってもらえれば、非常に嬉しく思います。

# 明治150年関連企画展「明治期の調布—教育・産業・戦争—」の開催について

調布市郷土博物館 芝崎 由利子

## ■はじめに

平成30年(2018)は、明治元年(1868)から150年、また、江戸から東京への改称・東京府開設から150年に当たる節目の年であったことから、各地の博物館等で「明治150年」や「東京150年」関連事業が開催されました。当館では、平成29年(2017)に、「大政奉還150年」を記念して、企画展「近藤勇と調布の幕末維新」を開催し、幕末維新期の調布について取り上げました。そこで、平成30年の「明治150年」関連企画展では、政治社会状況を主軸とした前年の展示とは異なるテーマを扱い、差別化を図りたいと考えました。明治期には、様々な分野で欧米に倣った改革や取組が進められ、江戸時代以来の農村だった調布市域でもその影響が顕著となります。1つの分野に特化した展示にすることも検討しましたが、複数の分野の資料から、明治期の調布の特色ある側面を様々な角度から取り上げていくことを主眼として、展示を企画しました。そして、資料や展示ケースの数・形態などを勘案して展示構成を考えた結果、教育・産業・戦争の3つの分野をテーマとすることにしました。展示の概要は、以下のとおりです。

### 1 会期

平成30年10月12日(金)～12月16日(日) 午前9時～午後4時 ※月曜休館(祝日の場合は翌日)

### 2 会場

調布市郷土博物館1階展示室 ※入場無料

### 3 展示資料数

83点

### 4 主な展示構成

#### 【教育】

- (1) 幕末から明治初期の教育機関
- (2) 布田郷学校の開設と養豚による学校経営
- (3) 学制による学校設立
- (4) 調布学校の開校・分裂・再合併
- (5) 明治時代の学用品・学校備品

#### 【産業】

- (1) 養蚕・製糸
- (2) ぶどう栽培とぶどう酒醸造
- (3) 漁業～多摩川の恵み～
- (4) 内国勸業博覧会への出品

#### 【戦争】

- (1) 徴兵令の発布と西南戦争
- (2) 日清戦争と日露戦争
- (3) 明治期の戦争に関わる忠魂碑・奉献額

## ■展示資料について

当館で、「明治」をタイトルに打ち出した企画展を開催するのは、実に20年ぶりのことでした。平成10年に開催した企画展「文字で見る明治の村～上ヶ給村の戸長役場文書を中心に

～」では、平成8年に当館に寄託された、明治時代の戸長役場文書を中心とした土方家文書を展示しました。この土方家文書には、明治期の学校に関する資料が多く含まれています。明治10年(1877)に開校した調布学校の卒業証書、習字本、教科書、調布尋常高等小学校の校訓などです。また、戦争に関する資料も含まれており、日清・日露

戦争の軍資金等の献納に対する東京府知事からの感謝状などがあります。本展では、平成10年の企画展では紹介できなかったこれらの資料の一部をお披露目しました。そのほか、当館寄託の下石原村の名主文書である熊沢家文書から、明治初年の就学状況に関する書上や、多摩川での漁業に関する願書などを展示しました。

本展は、古文書を中心に、関連する道具などの資料をあわせて展示する構成としましたが、古文書に関して、当館収蔵のものだけでは内容・量ともに不足していました。そこで、これを補完するために、市史編さん史料を活用しました。市内の旧家に伝わった村方文書のうち、昭和の終わりから平成にかけて行われた市史編さん事業に用いられた古文書の一部については、現在、調布市総務部総務課が管理しています。市域の近世・近現代史を取り上げる際に、これらの市史編さん史料は大変重要ですが、最近まで体系立てて展示紹介したことがありませんでした。それが、平成29年の企画展「近藤勇と調布の幕末維新」の開催をきっかけに、総務課の協力のもと、市史編さん史料の展示が叶い、本展でも展示の要となりました。こうした所管の違いにより、普段は別々に保管されている同一資料群もあり、それらを一緒に展示できたことは意義深いことでした。

以下、明治期の調布における教育・産業・戦争それぞれについて、主要な展示内容を紹介します。

## ■内容紹介①—明治期の調布における教育—

幕末から明治初年にかけて、調布市域にはすでに寺子屋・私塾等の私設の教育機関がいくつか存在していました。これらが母体となって、明治5年(1872)の学制発布以降、公立小学校が設立され、統合・分裂を繰り返していきます。学校の制度や変遷は複雑であり、本展においては詳細に取り上げることではできませんでしたが、学校系統図などのパネルを作成することで、わかりやすい紹介ができるよう工夫しました。明治期の調布の教育史において注目されるのが、学制発布以



展示ポスター

前の明治4年(1871)、地元の有志たちによって上布田宿に開設された「布田郷学校」です。布田郷学校は、学校附属の養豚所を経営し、その収益で授業料を無償にするという極めてユニークな学校運営をしていました。明治6年(1873)には、人家密集地での養豚が衛生面から禁止された影響等により廃止されましたが、その間、200余名の生徒を育て、学制による公立小学校への橋渡しの重要な役割を果たしました。そして、明治10年(1877)に3校合併により開校した「調布学校」へと系譜がつながっていきます。調布学校は、明治22年(1889)に誕生した調布町の町名の由来ともいわれており、現在の調布市の成り立ちを考えるうえでも重要です。調布学校が分裂の後に再び合併し、明治34年(1901)に調布尋常高等小学校が誕生して明治の終わりを迎えます。本展では、この間の学校の運営や就学児童に関する文書のほか、石盤などの学用品を展示しました。



### ■内容紹介②—明治期の調布における産業—

調布市域では、明治期を通じて、米・麦作を主体としながらも、副業の養蚕・製糸・製茶の比重が増し、加えて、甲州街道や多摩川の存在と関わり合いながら、農業以外の多彩な産業が展開しました。本展では、この時期の特徴的な産業として、「養蚕・製糸」、「ぶどう栽培とぶどう酒醸造」、「漁業」を取り上げました。また、市域から内国勧業博覧会に出品した人たちとその品についても紹介しました。

明治の終わり頃、市域の養蚕戸数は農家全体の7～8割に及んでいました。当館では、養蚕・製糸に関する道具を多数収蔵しており、そのいくつかを展示しました。展示資料の大半が古文書であった中、これらの道具資料がアクセントとなり、展示に立体感が加わりました。

展示に関するアンケートの中で、最も反響があったのは、ぶどう栽培についてでした。市域では、上布田の原雄一が、明治22年(1889)から外国種の苗を改良してぶどう栽培を始め、



大正中期まで「丸玉葡萄園」を経営していました。展示した丸玉葡萄園の広告には、商品として「多摩葡萄酒」、「滋養甘味葡萄酒」が紹介されています。来館者からは、「意外だった」、「知らなかった」などの感想が寄せられました。

### ■内容紹介③—明治期の調布における戦争—

明治6年(1873)、明治政府は徴兵令を制定し、国防のための兵役を国民の義務としました。西南戦争をはじめ、日清・日露戦争では、調布市域からも、従軍による戦死者や負傷者が出ました。

西南戦争で戦死した上石原出身の秋輪次郎ら6名の招魂碑は、修理を経て、現在も西光寺(調布市上石原)の山門脇に建ちます。展示では、招魂碑の建築願、招魂祭の祭文、招魂祭で興行された勸進相撲の番付表額などを紹介しました。

そのほか、日清戦争に関する資料では、調布町の戦勝大祭の様子が記された日記、日露戦争に関する資料では、神代村戦死者への弔辞、軍服などを展示しました。

また、明治期の戦争に関わる市内の碑・奉獻額の写真をまとめてパネルを作成しました。本展に2度来館くださったという方のアンケートには、「布多天神などにある碑を見に行った。今まで何気なく見過ごしていたが、興味深く感じた」との感想がありました。現地ではしか見られない文化財を紹介する機会は、刊行物や文化財巡りなどの事業が中心となっていますが、関連する展示の折に写真などで紹介することにより、より多くの方に知っていただけたということを実感しました。



### ■おわりに

本展は、複数の分野を取り上げたことで、内容が散漫になった感否めませんが、「当時の調布のトピックがわかってよかった」という来館者の感想があったように、明治期の調布の特色ある側面を様々感じ取っていただきたいという開催目的は、ある程度達せられたように思います。また、本展をきっかけに、明治生まれの父親が多摩川での漁で使用していたという漁具類を寄贈してくださった方がいたことは、喜ばしいことでした。明治期の調布を語るうえでは、多摩地域で盛んであった自由民権運動など、欠かせない重要なテーマがほかにもあります。今後も折を見て、本展とはまた違ったテーマ・視点からも、明治時代を扱う展示を企画していきたいと思っています。

## プラネタリウム リニューアル!

府中市郷土の森博物館 塚田 小扶里

街の中に突然現れる大きな森。まるで過去にタイムスリップしたかのような森の中にプラネタリウムはあります。1987年の府中市郷土の森博物館開館当初からプラネタリウムは設置されており、府中の歴史や文化とともに宇宙を体感する場を提供してきました。30年間のプラネタリウム利用者は200万人以上。たくさんのお客様にご利用いただきましたが、時代の流れとともにプラネタリウム設備も老朽化し、2017年10月に初代プラネタリウムが引退。そして2018年5月、設備を一新し、新しいプラネタリウムに生まれ変わったのです。

新しいプラネタリウムは「ケイロンⅢ・ハイブリッド」。光学式投射機と全天周デジタル映像システムを組み合わせて様々な表現ができるハイブリッド式プラネタリウムです。

光学式投射機「ケイロンⅢ」は、以前の機種GL-ATに比べ、映すことができる星の数は1万2千個から約1億個へと大きく増え、天の川の星ひとつひとつも星で再現できます。投射される星像の大きさも小さくシャープになったことや、3.5等級以上の星の色を正確に再現したことで、本物の星空にぐっと近づきました。「今、最も本物に近い星空」と言っても過言ではありません。さらに、投射機のサイズも直径48センチとコンパクトになったり、動作音も小さくなったので、星空の世界に没入することができます。

全天周デジタル映像システム「バーチャリウムX」では、レーザー光源の4Kプロジェクターを採用し、直径23メートルという東日本最大級のドームでも明るく美しい映像を体感することができます。府中から見上げた星空はもちろん、100万年前から100万年後の星空や、太陽系の別の惑星から見た星空まで映し出すことができます。まさに時空を超える星空タイムマシンです。

新しくなったのはプラネタリウム機器だけではありません。30年の歴史を刻んだドームのスクリーンも全面張り替え、美しい映像を引き立てています。座席もゆったりとしたものに替え、二人掛けのベンチシートも設置し、ファミリーや二人連れのお客様にご好評いただいています。座席には「レスポンスアナライザー」を設置したことで、投射中のクイズやアンケートにボタンを押して回答していただけるようになりました。ステージも新たに設置し、コンサートや講演会の開催も可能です。また、車椅子に乗ったままご覧いただけるスペースや外に声が響きにくい遮音室もあります。「聴覚障害者用補聴システム」も導入し、専用受信機の貸し出しも行うことで、どなたでもお楽しみいただける空間を目指しました。

しかし、大切なのは新しい機械や設備をどう生かすかです。今回のリニューアルでは、「府中(Fuchu)には宇宙(Uchu)がある」をコンセプトにしました。「Fuchu」の単語の中に「Uchu」が入っていることにお気づきでしょうか。新しいプラネタリウムを使って星や自然に関わる郷土の新たな魅力を発信し、郷土の森博物館ならではの天文普及を目指しています。リニューアルオープン後の投映では、現在の府中の風景と再現した江戸時

代の府中宿の風景を使い、時代を超えた星空を投映。大國魂神社や、熊野神社の古墳まつりなど、地域の魅力も一緒に紹介しました。2018年の大イベントだった火星大接近の時には、博物館に収蔵されている「西郷星」の錦絵を使い、西南戦争のころに明るく輝いていた火星が西郷どんだ!と騒ぎになったことも取り上げました。また、プラネタリウム番組のポスターでも、博物館名物の梅やハケ上団子を持ち、江戸時代の旅装束を着たオリオン座を打ち出すなど、博物館らしさを演出しています。

さらに、プラネタリウムと同時にリニューアルした天文展示コーナーでは、府中市内にあった二十三夜塔や地元NECが制作した人工衛星の模型などを展示。地域とのつながりにもこだわっています。



新しいプラネタリウムの設備の活用にも挑戦しています。リニューアル後から始めた、スタッフが45分間生解説で星空を紹介する「星空の時間」では、府中から見える今夜の星空を日々投映。街中で見られる星空も満天の星もリアルに再現しています。また、レスポンスアナライザーを使ったクイズを取り入れるなど、お客様に飽きずに見ていただける工夫を行っています。2018年度冬に投影中の「冬の星とオリオン座」では、聞いてみたい話題をお客様に投票していただき、その結果によって投映内容が変化する構成にも挑戦し、内容が毎回違うということも。レスポンスアナライザーを使った生解説だからこそ実現できる内容で、「見る」から「参加する」プラネタリウムへと進化しました。

3万年前の旧石器時代から100万年後の未来まで、時空を超えて府中の歴史や文化、星空を体感できる郷土の森博物館。森の中のプラネタリウムは、新しい時代とともにこれからも進化し続けていきます。

# 平成30年度活動報告—カビの研究からシルクロード・アニメーションまで—

帝京大学総合博物館 甲田 篤郎

本館は、平成27年9月に帝京大学八王子キャンパス内にあるソラティオスクエア地下1階に開館した博物館です。3年目となる今年は、本学の学術研究成果の紹介に加え、他館との連携企画や地域の方を対象とした公開講座など活動の幅をさらに広げることができました。ここでは平成30年度に実施した主な活動を紹介いたします。

## ■帝京大学医真菌研究センター創設35周年記念「カビ展」— 医真菌学研究への誘い—（平成30年6月18日～10月5日）



「カビ展」展示室エントランス

私たちの身近にいるカビの生態や、カビが原因の病気(真菌症)を研究している帝京大学医真菌研究センターの35年のあゆみと最新の研究活動を通して、奥深い医真菌学研究の世界を紹介する展覧会です。

第一部「カビ(真菌)の世界」では、未知のものも合わせると150万種に及ぶカビたちの「衣・食・住」を紹介するとともに、発酵食品作りや医薬品開発に活用されてきたカビやカビの研究史、あわせて「真菌症」の原因となる病気をおこすカビたちについて顕微鏡や写真を通して、ご覧いただきました。第二部「カビが原因の病気の克服を目指す研究所」では、真菌症の治療薬である「抗真菌薬」の研究をはじめとして、宇宙ステーションでのカビのふるまいを調査する「宇宙微生物学」、マウスの代わりにカイコを使って実験を行う「カイコ創薬」など基礎研究から応用研究まで、幅広い医真菌研究センターの活動を展示しました。

関連イベントとして開催された、ミニ講演会や最新研究講座には、カビに関心を持つ一般の方から薬剤師・研究者まで、近隣のみならず遠方からも多くの方にご参加いただきました。また、電子顕微鏡を用いたワークショップや、ペットボトルで顕微鏡を作成する科学工作教室には、夏休み期間ということもあり小学生の参加が多くありました。講座の後に自由研究の内容について医真菌研究センターの教員に直接相談する様子もみられました。大人から子どもまで多様な来館者に好評を博す展示となりました。

## ■帝京映画教室「16ミリフィルムでみる名作アニメーションの世界」(平成30年7月18日、9月19日、10月3日、11月7日)

本イベントは、学内で発見され現在当館に収蔵されている16ミリ映写機を活用しての上映会で、フィルム映画に親しんでもらうことを目的に開催しました。今回は「名作アニメーション」をテーマとし東京都立多摩図書館から16ミリ映画フィルムの貸出協力を得て「古典」とされる作品と「多摩に所在するプロダクション」が制作した作品を4回にわけて上映しました。さらに、アニメーションを専門とする本学教員が解説を実施し、DVDや自宅での鑑賞とは一味違ったイベントとなりました。

## ■平山郁夫シルクロード美術館連携企画「平山郁夫と旅するシルクロード—スケッチブックのなかの対話—」(平成30年10月13日～12月15日)

平山郁夫シルクロード美術館(山梨県北杜市)が所蔵する氏のスケッチとコレクションを通し、シルクロードの雰囲気味わうとともに、帝京大学シルクロード学術調査団がキルギス共和国にて発掘調査を進めている、東西の結節点として栄えた交易都市のひとつ、アク・ベシム遺跡についても紹介する展覧会です。

日本画家・平山郁夫(1930-2009)は世界各地を旅し、多くのスケッチを残しました。旅先の限られた時間のなか、5分、10分、30分と、その許される時間のなかでモチーフを選択し、最小限度に必要な線からはじめて対象を的確に捉えていくスケッチは素描や本画の基礎であり、それ自体が一つの作品です。メイン展示である「旅とスケッチ」では、中国・中央アジア・西アジア・地中海世界の4地域別にスケッチブックとシルクロードコレクションを展示し、平山画伯がスケッチをしている脇に立って遺跡を見えるような、現地の風を感じられるような企画を試みました。

帝京大学シルクロード学術調査団は、次年度春にもキルギス共和国科学アカデミーと共同調査を実施予定です。建物群の構造や配置、道路などの都市構造解明に向けて、みなさまも引き続きご注目ください。



「平山郁夫と旅するシルクロード」ポスター

# デジタルアーカイブの構築と公開

(公財) たましん地域文化財団 保坂 一房

## HPの開設と情報発信

当財団では、21世紀最初の年2001年5月にホームページ(HP)を開設しました。たましん歴史・美術館、御岳美術館、たましんギャラリー3施設の展示情報や、『多摩のあゆみ』と歴史資料室の案内、刊行物の内容などを紹介しました。

開設してすぐに、『多摩のあゆみ』バックナンバーの総目次を掲載しました。歴史資料室で所蔵する資料(図書・雑誌・地図・絵葉書・チラシ)の検索システムは、2004年7月に公開しました。資料群によって、それぞれの検索項目を変えて検索できるように、例えば地図の場合は、縮尺からも検索できるようにしました。絵葉書とチラシについてはタイトルだけでは分かりづらいので、どこの地域のものか、地域名でも検索できるようにしました。絵葉書の古いものは画像もUPしました。

その後、雑誌の論題情報の入力をすすめて、2007年12月より論題名や著者名でも検索できるようになりました。多摩を対象にした歴史民俗系雑誌26誌の著者と論題をUPして、以後、順次誌数を増やしています。2010年9月にはチラシの画像を追加し、2012年4月の公益財団法人化にともないHPをリニューアルしました。2013年9月からは、所蔵しているポスターのテキスト情報を追加しました。

## デジタルアーカイブの公開

2017年9月、『多摩のあゆみ』バックナンバーのうち、創刊号～第100号までを、全国の図書館・博物館など50機関(当時)が掲載されているTRC-ADEAC株式会社のデジタルアーカイブ

システムに公開しました。『多摩のあゆみ』の本文が閲覧できるデジタルアーカイブの公開により、インターネット上の情報発信は新しいステージに入りました。

2018年11月、ADEAC:デジタルアーカイブシステムに、歴史資料室所蔵の絵図・地図16点とチラシ23点の計39点を公開しました。このうち、絵図・地図カテゴリーにある「東京府郡区全図」をご紹介します。同図は国立公文書館や東京都公文書館、都立中央図書館などでも所蔵しているものです。東京府が編集製図して、明治29年(1896)7月に神田区淡路町の清華堂より発行されました。明治26年4月に北多摩、南多摩、西多摩の多摩三郡が神奈川県から東京府に移管されたから、3年後の状況を示したものです。また、明治29年4月には南豊島郡と東多摩郡が合併して豊多摩郡が発足し、東京市に隣接する南葛飾、南足立、北豊島、豊多摩、荏原の五郡が成立したときでもあります

デジタルアーカイブは、スムーズに画像を拡大して細部まで詳しく見ることができます。中心部の東京市15区は外郭の区画を示すのみですが、郡部の部分には鉄道や街道・道路の種別、町村内の字名や小学校、役場の場所などが鮮やかな色を用いて記されています。字名は町村制成立以前、江戸期以来の村名や所在場所を比定できる大変重要な情報をいえます。

当財団では、これからも所蔵している各種資料を順次デジタルアーカイブで公開して、利用できるようにしていく予定です。



東京府郡区全図(部分) 東京府清華堂、明治29年7月発行



# 平成30年度活動報告

瑞穂町郷土資料館けやき館 関谷 学

平成30年度は、主に次のような特別展・企画展やイベントを開催しました。

## ○主な特別展・企画展

企画展「みずほの花図鑑～早春から初夏にかけて～」(平成30年4月14日～6月10日)

春から初夏にかけて咲く様々な花など、身近に見ることのできる植物を数多くの写真や絵画などで紹介しました。会期中には講演会「雑木林に生きるキノコの役割」を開催し、食べられるキノコや毒キノコなどの様々なキノコや、雑木林でのキノコの役割などについて解りやすく解説しました。また、ギャラリートークも開催しました。

特別展「アメリカンハウス」(6月16日～7月16日)

アメリカンハウス(米軍ハウス)について、建設された経緯や構造・内装などの特徴や日本住宅との違いなどを数多くの写真等を使用して解説し、また芸術家やミュージシャンなどが住み、新たなカルチャーが生まれる舞台ともなったハウスの価値や魅力を紹介しました。

企画展「瑞穂の旧石器～氷河期を生きた瑞穂の旧石器人～」(平成30年7月14日～9月9日)

松原遺跡や狭山遺跡、浅間谷遺跡など、町内で発見されている旧石器時代の遺跡にスポットを当て、最近の発掘調査で出土した様々な遺物やそれぞれの遺跡の特徴などを紹介しました。

また、石器に使用された様々な石材や、実際に復元製作した石器などを展示し、石器の作り方や使い方なども紹介しました。会期中にはギャラリートークを開催しました。

コレクション展「昭和のおもちゃと映画ポスター」(平成30年9月15日～10月14日)

ゴジラや仮面ライダーなど、昭和の様々なキャラクターのおもちゃや銀幕を彩った映画のポスターなどを多数展示し、かつて町内にあった映画館なども紹介しました。会期中は、関連企画として昭和の映画「ギターを持った渡り鳥」の鑑賞会や、瑞穂町を拠点に活動する世界的造形師村瀬継蔵氏のトークライブ「瑞穂より生まれた怪獣たち～瑞穂町での40年を支えたもの～」を開催しました。

企画展「吉川緑峰～画業と足跡～」(平成30年10月27日～12月23日)

入間郡二本木村(現入間市宮寺)に生まれ、江戸時代末期から明治時代初期にかけて活躍した吉川緑峰の画家としての業績を、町内や近隣地域に残された数多くの絵画資料によりたどりましました。また、村政や茶業の振興、水車の経営など多岐に渡る事業に携わった緑峰の事業家としての足跡を、様々な古文書などにより紹介しました。会期中にはギャラリートークを開催しました。

特別展「和紙の灯り展～森の生きものたち～」(平成31年1月10日～1月31日)

灯りは古来より人やモノを照らす照明器具として使用されてきましたが、現代では照明器具だけでなくインテリアとしても使用されています。本展では、“和紙”と“森に生息する生き物”をテーマに、ふくろうや植物を模した灯りを展示し、“灯り”のさまざまな形を紹介しました。また、同会場内に、行灯やカーバイドランプ、瑞穂町近郊で作られた和紙を展示し、“灯り”や“和紙”の歴史を紹介しました。

企画展「ひなまつり展2019」(平成31年2月16日～3月5日)

当館に隣接する耕心館と合同で開催する、この季節恒例となった催しです。町民より提供いただいた雛人形や晴れ着、地域のボランティアの方々が作成したつるし飾りなどの展示のほか、つるし飾り作りのデモンストレーションや民話の語り、もちつき体験なども実施しました。毎回大変好評を頂いており、今回も専用シャトルバスを運行するなど非常に多くの方々にご来場頂き、大変賑やかな催しとすることができました。

## ○その他の主なイベント

温故知新の会

郷土の歴史や自然に関する講演会や、子ども向けの体験教室などを定期的で開催し、今年度は狭山茶の手もみ実演やゆでまんじゅう作りなども実施しました。

囲炉裏端で語る昔話

常設展示室内に再現した民家の囲炉裏端を会場に、地域の方を講師に迎え、地元の言い伝えや昔のできごとなどを語って頂くイベントを定期的で開催しました。

親子折り紙教室

親子で楽しめる折り紙教室を定期的で開催しました。

イブニングトーク

夕方時間帯に、落語会や朗読会を定期的で開催しました。

わくわく工作教室

各種の子ども向け工作教室を定期的で開催しました。

みずほはたおり探検隊

7月から11月にかけて、町の伝統的な絹織物「村山大島紬(つむぎ)」を題材にした機織り・染色の体験教室を開催しました。

第19回 狭山丘陵市民大学

東村山ふるさと歴史館、東大和市立郷土博物館、武蔵村山市立歴史民俗資料館との合同事業として開催、今回は「狭山



丘陵のみちと石造物」をテーマとして実施しました。

企画展「吉川緑峰～画業と足跡～」ギャラリートークの様子

## 古民家園での展示の取組み

狛江市立古民家園（むいから民家園） 阿部 智史

狛江市立古民家園は、地域文化の継承と発展に寄与することを目的に、建造物を含む資料の展示、昔の暮らしや伝統文化について学ぶ体験教室など、郷土の歴史や民俗等に関する事業を行っています。こうした事業のうち、ここでは平成30年度に取り組んできた展示について紹介します。

まず、平成30年6月8日から15日まで、「ちょっと昔の暮らしの道具」と題する展示を開催しました。展示した資料は、市民の方から寄贈いただいた民具で、園内の旧荒井家住宅主屋のチャノマを展示スペースとして使用しました。

展示は、衣・食・住の3つに分けて構成し、古民家のチャノマの雰囲気を活かすことを念頭に、展示する資料を選別していきました。衣のコーナーでは、農家の女性が使用していた綿入れ、長持ちなどの収納道具、衣生活に関連の深い洗濯板や炭火アイロンなどを展示しました。食のコーナーでは、囲炉裏を囲んだ食事の風景を意識してお膳などを展示し、また、カマドを使った炊飯の様子を紹介しました。住のコーナーでは、長火鉢や檜炬燵などの暖房器具を展示しました。展示に当たっては、味気なく資料が並ぶことにならないよう、昔の暮らしの様子を再現することに努めました。来園者からは、「懐かしい」といった声をいただき、展示を通じて昔の暮らしを思い出し、振り返っていただく機会が提供できたのではないかと考えています。また、普段は古民家の各部屋に資料を展示しておらず、建物のみ公開となっており、生活感を感じにくい状況になっています。部屋の中に衣・食・住に関する資料を展示することによって、古民家がかつて暮らしの場

であったことを改めて実感できる機会になったのではないかと思います。

次に、年中行事の展示についてですが、例年、節句などの時期に合わせて展示を行っています。上巳の雛人形、端午の五月人形などのほか、正月飾りや盆柵飾りなどを展示しています。また、体験教室や参加型の事業と関連させて、まゆ玉飾り、七夕飾り、十五夜飾りを展示しています。十五夜飾りの展示は、子どもを対象とした月見団子作りの体験教室と合わせて行い、まゆ玉飾りと七夕飾りの展示は、子どもたちにまゆ玉や短冊を飾り付けてもらっています。子どもたち自ら飾りを作ってみたり、飾り付けに参加することで、楽しみながら年中行事に対する理解を深めてもらいたいと考えています。

こうした展示のほかに、旧荒井家住宅主屋の縁側に干し柿を吊るしたり、事務所の周りに麦わらを干すなど、昔の風景を再現するような演出も行っています。こうした取り組みも古民家園の展示の一つと考えています。

最後に、次年度に向けて、展示スペースとして活用している旧高木家長屋門の納屋内の展示替えを進めています。これまでは、狛江がかつて農村であったことをイメージしやすいように、農具の展示を行ってきましたが、明治・大正期に盛んであった養蚕や多摩川での漁業も含め、農業・蚕業・漁業の3つに分けた昔の狛江の生業をイメージできる展示に替えて行きたいと考えています。そして、こうした展示の取組みが、郷土の歴史や民俗等に親しみを持つための一助になればと考えています。

## 平成30年度活動報告

集合住宅歴史館 溝口 忠

### ■「団地の歴史を体感しよう！」見学ツアーを開催

平成30年12月26日（水）UR都市機構主催（朝日小学生新聞協力）により「団地の歴史を体感しよう！ー見て ふれて 感じて 楽しもう！ー」をキャッチフレーズに小学生とその保護者（午前・午後 計17組 計36名）を対象に見学ツアーを開催しました。集合住宅歴史館到着後、昭和35年に製作された団地のビデオ映像を鑑賞、まず子供や保護者の心を昭和の時代へタイムトリップ…いざ見学ツアーへ！見学途中所々に3択クイズ4題とボーナスクイズ1題を出題、手動脱水式の洗濯機を前に「昔はどのように脱水したのかな？」との問題、「ビデオの中でお母さんがハンドルを回してたね」など、クイズを楽しみながら回答し、答え合わせ。正解数に応じてお菓子のつかみ取りを実施、小さな手を存分に使用してお菓子をたくさんゲットしていました。ワーク



（見学ツアー）同潤会代官山アパートにて

ショップとして団地のジオラマづくり、子供たちは真剣になって製作に励み、作ったジオラマを並べて大きな団地が完成！最後に参加者全員で団地と一緒に記念撮影。楽しかった思い出と一緒にジオラマをお持ち帰りいただき、大盛況で終わりました。

### ■集合住宅歴史館の来場者について

平成10年4月に一般公開を開始した集合住宅歴史館は、昨年とほぼ同数の来場者が見学されました。平成30年来場者を業種別で分類すると、学校関係が一番多く28.8%（前年34.5%）、次いで官公庁等20.1%（前年24.2%）、不動産・建設関係24.7%（前年22.1%）、その他26.3%（前年19.2%）でした。来場者のアンケート結果は“高い”と“やや高い”を合すると約97%（前年約97%）の方から高い満足度が得られました。



（ワークショップ）団地のジオラマづくり

## 奥多摩水と緑のふれあい館 活動報告

奥多摩水と緑のふれあい館 加藤 勝康

奥多摩水と緑のふれあい館は、小河内ダム（奥多摩湖）の湖畔にあります。入口を入っていただくと床面いっぱいの多摩川マップと、吹き抜けの輝くオブジェが、みなさんを出迎えます。「水のふるさと」では、奥多摩の歴史・民俗を紹介します。「水が生まれる」では、大切な水道水源林の秘密を楽しく体験でき、小さなお子さんにも人気の場所です。「水が集まる」では、小河内ダムの秘密と、周辺の豊かな自然を知ることができます。そして「水が輝く」では、迫力ある立体映像で、奥多摩の自然を体感することができ、さらに「水が広がる」では、館のマスコット“クリン”と一緒に水の旅を体験し、水に関する問題について考えます。「パノラマショップ」では、奥多摩の名産品を取り揃えてお待ちしています。最上階にある「パノラマレストラン・カタクリの花」では、湖を見ながら、奥多摩の郷土料理や小河内ダムカレー（1日20食限定）が味わえます。

水はどこからやってくるんだろう？

どうして蛇口をひねると、いつでも水が出て来るんだろう？

川はどこから始まるんだろう？

緑のダムってなんのこと？ 奥多摩ってどんなところ？

どんな生き物がすんでいるの？

こんな疑問にお答えします。水と緑と奥多摩を再発見してください。

### 【ふれあい館の催し物】

4月14・15日はソプラノ歌手による「春のミニコンサート」、6月1日から7日までは「東京都水道週間」で鉢植えの花と東京水道水を配布、7月28日は「夏のフラダンスショー」8月1日から31日まで「小河内ダム写真展」、9月9日の「水源郷土芸能フェスティバル」では、小河内の郷土芸能である国指定の重要無形民俗文化財の鹿島踊や、東京都指定無形民俗文化財の獅子舞の公開、10月13日には「ヘブンアーティスト」によるマジックとパントマイムの公演11月10・11日には会館20周年式典と「都民交響楽団」有志の皆さんによる秋のミニコンサート、12月15・16日には「紡ぎ体験」を開催しました。平成31年3月10日には「川野の車人形」の公演を行います。

年間を通して、催し物を行っていますので、多くの皆様のご来館をお待ちしています。



開館20周年記念秋のミニコンサート

## 平成30年度の活動報告

江戸東京たてももの園 阿部 由紀洋

江戸東京たてももの園では、移築復元し建物と、それらが作り出す街並みを活かしたイベント（情景再現事業）を、1年を通じて様々な行なっています。今年度も、5月に開催した「こどもの日イベント」を皮切りに9回、事業を実施しました。そのいくつかをご紹介します。

### ■こどもの日イベント（平成30年5月4日、5日）

毎回、多くの子供たちでにぎわうイベント。今回は初夏を思わせるような陽気の中、たくさんの方々にご来園いただきました。当イベントの目玉は、商店建築の建ち並ぶ「東ゾーン」内で行なわれる「お使いゲーム」。参加する子供たちにお使いメモと「たてももの円」というお金を渡し、メモに書かれた品物（シール）を全部集めるというゲームですが、買い物かごを片手に目当ての建物を探し回り、対象の建物にはボランティアが店主として入り、子供たちを迎えます。このほかベー



おつかいゲームの様子

ゴマ大会や建物のペーパークラフト作り、ベーゴマ大会や民家の庭先での動物園（4日のみ実施）など、多様な催しで盛り上がりがありました。

### ■下町夕涼み（平成30年8月4日、5日）

開園時間を20時30分まで延長し、夜のたても

もの園を楽しんでいただくイベント。園内東ゾーンの広場にやぐらを作り、太鼓等の演奏で盆踊りを楽しんだり、子供たちにお神輿を担いでもらうほか、小金井市商工会を通じて屋台を出すなど、夏祭りの気分が味わえる催しです。また鯉節削り体験（乾物屋）や和傘の貸し出し（和傘問屋）、子供にお祭り用の化粧をしたり（化粧品屋）切り花の販売や文房具の販売など、展示建物に関連した催しも多数開催し、建物をより身近に感じていただく機会にもなっています。今回は寄席を開催し怪談を演じていただきましたが、嘶家さんもお客様も会場の雰囲気を楽しみ、楽しんでいただけたようです。猛暑が続いたこの夏でしたが、つかの間の夕涼みを味わっていただきました。

### ■紅葉とたてもものライトアップ（平成30年11月23日、24日、25日）

色づき始めた木々や建物をライトアップして、普段とは違うたてももの園を演出する3日間。この時期、様々な場所がライトアップされ華やかな雰囲気となりますが、園のライトアップは建物のあかりが主役なので、少々暗めのライトアップです。そこでお客様には懐中電灯をお渡しして散策していただいています。夏の夜間開園とは違い、しっとりと落ち着いた雰囲気のイベントとなっています。また、あかりの歴史を体験できる催しや、普段は使用していないガス灯を点灯したり暖炉に火を入れたりすることで、日常では味わえない明るさやぬくもりを体感できます。今回はライトアップの光源にLEDを使用したのも、よりシャープな印象になりました。

## 最近の活動報告

五日市郷土館 野々村 めぐみ

### ◆企画展「明治150年記念 あきる野に伝えられた祭り囃子」(平成30年5月24日～7月30日)

明治期に市内に伝えられた祭り囃子について、どのように市内の各地域に伝えられたかを流派別に系譜で解説し、現在も各地域で多くの人々によって受け継がれている祭り囃子について紹介しました。

### ◆講座「明治150年記念 あきる野に伝えられた祭り囃子」(平成30年6月30日)

上記の企画展に関連する講座を開催しました。あきる野市文化財保護審議会委員を務められている溝口重郎さんに講師として市内で愛され、伝承されてきた祭り囃子について分かりやすく解説していただきました。

### ◆企画展 明治150年「五日市憲法とその時代」(平成30年8月16日～平成31年3月17日)

平成30年は、明治元年から今年が150年、五日市憲法草案発見から50年にあたる年になります。五日市憲法草案が作成された明治期の五日市町の街並みを絵図上に復元し、江戸時代から炭や木材、生糸などで繁栄していた町の様子を明らかにし、また当時の古い町並みの写真や野口医師の日記等も展示しています。また、学芸講演会や自由民権運動に



展示の様子

関する文書等を展示し、五日市憲法草案が作成された当時の五日市の経済力・文化的背景を探る内容となっております。

展示期間は当初は平成30年8月16日から12月16日までを予定しておりましたが、好評につき平成31年3月17日まで延長をさせていただくことになりました。

### ◆第16回ヨルイチ協力事業(平成30年8月25日)

ヨルイチは、IR武蔵五日市駅前から小中野交差点までの檜原街道沿いなどで開催されるイベントです。その協力事業として旧市倉家住宅を使った「楽しい昔ばなし・語り」と秋川キララホールとの共催で、小島康平さんの津軽三味線生演奏によるミニコンサートを開催しました。当日は天候にも恵まれ、多くのお客様が来館されました。



小島康平さん 津軽三味線生演奏の様子

## 市制施行60周年事業 —市史編さんの完成—

小金井市教育委員会・小金井市文化財センター 高木 翼郎

平成30年度は、本市が昭和33年に市制を施行してから60年、人間で言えば還暦です。そのため、市を挙げて周年事業が展開され例年以上に種々の事業が行われ、中でも周年事業の目玉の一つは『小金井市史 通史編』の発刊でした。

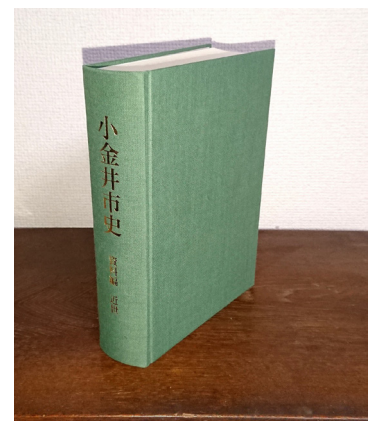
市史編さん事業は、旧市誌を継続・発展させる形で平成20年度から本格的に始まりました。市史編さんのために必要な古文書や考古資料等の大半は、小金井市文化財センターの収蔵品であり、本館を拠点に調査・研究が進められてきました。

その成果である『小金井市史』シリーズは、「小金井桜」「近世」「近代」「現代」の4巻の資料編が既に刊行され、周年事業の本年度には資料編「考古・中世」が、そして集大成である「通史編」の2巻を発刊したことで、一応の事業の完成をみましました。

本市は、旧市誌完了後も編さん組織が解散されず、継続して調査を進めていったことが特徴にあります。本館及び市史編さん・市民協力員が一体となって資料収集や調査が行われ、さらに「小金井市史編纂資料」を発刊し続けたこれまでの蓄積が、今回の『小金井市史』刊行に大いにいかされることとなります。

集大成である「通史編」では、約35,000年前の旧石器時代から平

成元年までの、長い歴史において、本市域を人生の舞台として活躍した多くの先人の姿がいきいきと描かれています。これによって、本市の歴史を一望できるとともに、その発展の様子を記録に止めることができ意義深いものです。本市では、市制施行60周年という節目の中で、将来の市のあるべき姿やまちとしての将来像を、広く長期的視野に立ち、市民協働の観点から、多くの市民と作り上げていくグランドデザインづくりを構想しています。『小金井市史』は、郷土の歴史を振り返るためのものだけではなく、現在を見つめるきっかけにもなるでしょう。地域の将来を展望するまさにグランドデザインをつくるうえで『小金井市史』が、大きなヒントを与えてくれることと確信しています。



## 平成30年度の企画展示

東京都立埋蔵文化財調査センター 高田 優衣

東京都立埋蔵文化財調査センターでは、平成30年度企画展示『蒼海わたる人々—考古学から見たとうきょうの島々—』を平成30年3月21日から平成31年3月10日まで開催しています。

今回の展示では東京都の島嶼地域の遺跡をとりあげ【Ⅰ 海の幸を求めて】【Ⅱ 島に生きる】【Ⅲ 海でつながる世界】の3つのテーマから伊豆諸島と小笠原諸島から出土した遺物と、その他の島々の遺跡、民族資料などをパネルと共に展示しています。

【Ⅰ 海の幸を求めて】ここでは、黒曜石や貝輪、海産物などについて解説しています。神津島の黒曜石は旧石器時代から盛んに使用されており、神津島や関東近県各地の黒曜石産地で得られた黒曜石の原石や、関東地方で出土する神津島産黒曜石で作られた石器が展示されています。ほかにも、縄文時代から貝輪の材料として珍重されていたオオツタノハや、奈良時代に都へ献上していた海産物加工に関する遺物などを紹介しています。

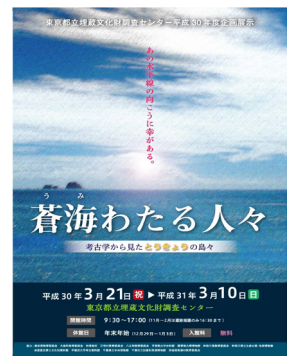
【Ⅱ 島に生きる】ここでは島の人々の生活について触れています。遺跡から出土する動物骨や魚骨、貝殻などから当時の人々の食生活を解説、また動物の角や骨を利用して作った道具などを紹介しています。ほかにも古墳時代から行われていた火山信仰に伴い、祭祀を行っていた痕跡や使用された遺物についても紹介しています。

【Ⅲ 海でつながる世界】ここでは島と外部のかかわりについて触れています。島に出土する遺物からは本土との交流がうかがえ、縄文時代では近畿から東北までのさまざまな地域の土器を、本土の弥生時代

にあたる時期ではるか南方、マリアナ諸島の特徴をもつ遺物を紹介しています。また江戸時代、関西と江戸を行き来していたと思われる江戸時代の沈没船から引き上げられた積荷の一部も展示しています。

中央では100年ほど前に現在のマーシャル諸島共和国で作られた大型カヌーの模型と木材・貝で作られた海図を学習院大学史料館からお借りし、展示しています。はるか南洋からの航海の様子を感じていただけるようにしました。

例年企画である文化財講演会では、今回の企画展のテーマと連動する形で3回開催しました。第1回「弥生人 島へ渡る 宝を求めて」、第2回「動物が語る伊豆諸島と本州縄文人との交流史」、第3回「神座す島々—伊豆諸島の祭祀遺跡—」について、それぞれ講演していただきました。同じ東京都内でも、島嶼地域の考古学については貴重な遺跡がたくさんあるにも関わらず、なかなか展示などで皆様の目に触れる機会はありませんでした。このたびの企画展示や講演会が、島の考古学についての見識を深め、島嶼地域が身近に感じられる良い機会となれば幸いです。



平成30年度企画展示チラシ

## 東京150年記念企画展「東村山の東京125年」

東村山ふるさと歴史館 松崎 睦彦

多摩地域が東京府に移管されて125年であった平成30年の秋に、本企画展を開催いたしました。本企画は当初、平成最後の秋であることに注目し、「平成の東村山」という仮タイトルをつけていました。平成30年間の市内の動き、特に産業を中心にしてその移り変わりを展示しようというものでした。「現代」にカテゴライズされる展示は、4年前の市制50周年記念展示がありましたが、この時は行政の動きが中心となってしまったので、その反省に立ち、市内の産業に目を向けよう、という意図もありました。また、景気が右肩上がりだった昭和の頃の東村山が、バブル崩壊等のあった平成の30年間で大きく変化した点を注目して、今回の企画を出しました。

ところが、平成30年秋は平成最後の秋であるとともに、「江戸」から「東京」に変わって150年という節目の年であること、多摩地域が東京になって125年目であるということで、急遽こちらも盛り込むこととなり、今回の企画展のタイトルとなりました。



展示にあたっては、東村山市商工会をはじめとして、市内の商工業者の皆さんの協力を

いただき、なるべく館蔵資料ではなく、店舗や事業所に置かれている資料に光を当てることを目的としました。資料点数としては多くありませんでしたが、昭和の時代の商店会の地図等、来館者の方にはありし日の東村山を思い出していただけのきっかけとなったのではないかと思います。

後付けで決まった平成より前の時代の東村山ですが、こちらについては準備不足から市制50周年の展示や鉄道展示等、以前の展示の焼き直しになってしまいました。東村山村誕生の経緯や東京府移管の経緯等について、資料ではなく文字で説明する部分が多くなってしまい、アンケートでの不満点が挙げられていましたが、それでも多摩地域がかつて神奈川県であったことや、甲武鉄道や川越鉄道といった鉄道が多摩の近代の扉を開けたこと等については、説明文がほとんどであったにもかかわらず、よい評価も得ることができました。

付随事業としては元職員の高野宏峰氏による講演会「明治時代における東京府東村山村の20年」を開催しました。明治の東村山をわかりやすく紐解く内容で、たいへん盛況でした。共催事業としては東村山観光振興連絡会主催の「東村山文化財ウォーク2018 まちの発展をたどる—東村山の東京125年」に協力いたしました。講演会として「鉄道とまちの賑わい」を開催し、展示解説を行ない、多くの来館者で賑わいました。

## 平成30年度活動報告—自然観察会を中心に—

羽村市郷土博物館 葛西 志耕

羽村市郷土博物館では、解説パネルを読むだけでは伝わりにくい情報を、実際に動かしてみたり、実物がある場所で見てもらうことで生きた情報に触れ、体験的に学んでいただきたいと考え、体験学習会や自然観察会などを実施しています。

現在実施しているこうした事業の母体となったのは、郷土博物館開館以前の公民館活動で、開館後にその一部を引き継ぐ形で出発しました。そのため当館の事業では専門家の研究成果の周知や知見の発表という観点だけではなく、社会教育の視点から効果的な学習、継続的な学習などを考慮しつつ、誰もが気軽に自分の興味関心を深める機会となるよう企画しています。

例えば、今年度は「人と自然が出会う場所 羽村堰で野鳥を見てみよう」というタイトルで自然観察会を実施しました。野鳥の観察については、他の博物館やビジターセンター等の施設でも多く開催されていると思います。当館でもこの自然観察会とは別に、日本野鳥の会奥多摩支部と共催して年に4回、季節ごとの野鳥を観察しています。

この観察会では、野鳥の観察のみならず自然をより身近に感じて

らい、同時に羽村の歴史や文化も見てほしいと考え、自然と都市の境にある文化財、玉川上水羽村堰の周辺をフィールドとすることにしました。玉川上水羽村堰は自然(多摩川)を都市(上水道網)に引き入れる入口です。このフィールドで野鳥を観察することで、これまでとは異なる視点から郷土羽村を感じていただければと考えました。

講師依頼に際しては、こうした認識をしっかりと擦り合わせました。結果として、市外の方にもご参加いただき、野鳥や羽村堰周辺の自然、また羽村の歴史・文化を日常の視点のままで、より具体的に感じていただけたのではと考えています。

当館は小規模館であるため、歴史・民俗・芸術・自然科学等様々な分野で事業を行う際には外部の専門家の方々の協力が欠かせません。専門家の知識だけに頼らず、博物館としてプラスできるエッセンスは何なのか、何をプラスすれば市民の興味関心を満たすことができ、またその先に羽村への愛着を培っていただくことができるのか、そういった視点を持って、これからも事業を行っていきたいと思います。

## 武蔵野ふるさと歴史館のフェローシップ

武蔵野ふるさと歴史館 米崎 清実

博物館、文書館において、将来の施設の運営や活動を担う人材を育成することは、重要な役割の一つです。武蔵野ふるさと歴史館では、将来、学芸員やアーキビストとなり、博物館や公文書館を担う人材の育成に寄与するために、フェローシップ(特別研修員)制度を始めました。

博物館や公文書館では職員を採用する際、採用したい分野の専門的な知識や技術を有していることとならんで、仕事に取り組む意欲や資質、さらには実務経験を考慮します。しかし、博物館や公文書館の仕事に就きたいという意欲のある学生は多いものの、実務経験を積むこと自体が難しい状況です。施設により異なるとは思いますが、職員から指示された業務を行う臨時職員(アルバイト)ではキャリアアップを図ることは難しいのが実情です。そこで、実績を積む機会として、フェローシップ制度を設けたのです。

武蔵野市教育委員会では、従来、大学生などのインターンを受け入れてきました。例年受け入れているインターンは、2~3日程度という短い研修期間のため、業務の一部しか経験することができず、実務経験を積むまでにはほど遠く、本人のキャリアアップを図ることができません。今回の制度は、それらと区別するためにもフェローシップ制度と名付けました。

当館におけるフェローシップは、当館職員(学芸員や公文書専門員など)と対等の立場で、自らのキャリアアップにつなげてもらうものです。具体的内容としては、当館の学芸員とともに、展覧会の開催

やそれに向けた資料調査、文献調査、図録制作、資料の収集、収蔵資料の整理、学校連携事業や各種教育普及事業等の企画、実施、あるいは公文書専門員と共に、公文書の選別、保存業務等に携わり、成果を発表してもらうことを想定しています。成果は業務として披露する他、武蔵野ふるさと歴史館の了承のもと、学術雑誌などに投稿、発表することもできます。

受け入れは随時可能としています。応募書類として、履歴書、計画書、指導教員の推薦状を送付いただき、書類審査と面接を経て、受け入れの可否を判断します。研修期間は特に規定しておらず、担当職員と調整のうえ決定します。報酬や謝礼はありません。交通費のみ1日あたり1000円を上限に支給します。対象は大学院在学中もしくは大学院を修了した若手研究者を想定しています。

昨年度末に要綱を作り、募集を始めたところ、一名の京都大学大学院生から応募があり、平成30年9月から業務を進めています。月2回程度の活動日に、史料調査を行い、歴史地理的な視点から「千町野」と言われていた武蔵野地域の新田開発の調査研究やGIS地図データの作成などを行っています。今回の調査研究の成果は、武蔵野ふるさと歴史館における展示としても発表してもらう予定です。

フェローシップの皆さんの成果は武蔵野ふるさと歴史館や武蔵野市にとって貴重なものとなるに違いありません。これからも武蔵野ふるさと歴史館を場として、自らのキャリアアップを図るとともに、武蔵野市に貢献いただく皆様からの応募をお待ちしています。

## 最近の活動報告

八王子市郷土資料館 河津 美穂子

当館は昭和42年(1967)に開館し、現在約10万点を超える収蔵量を誇っています。豊富な資料を活用し、毎年2回の特別展のほか、企画展、体験学習・講座、紀要やだよりの発行など、多様な事業を行っています。

### 【特別展】

#### 1. 「近世八王子 文芸の息吹—学問と芸術の世界—」

(会期：平成30年10月13日～11月25日)

江戸時代の八王子における豊かな文芸活動を紹介することで、郷土に誇りと愛着を感じ、地域の文化や行事、日々の生活に、改めて目を向ける機会としてもらうことを目的に開催しました。

主な展示物：手習い本や往来物、松原庵星布短冊(俳句)、峡中紀游草(漢詩集)、富嶽遠望図(絵画)、桑都年中行事など



「近世八王子 文芸の息吹」展示風景

#### 2. 「八王子のおまじない」

(会期：平成31年2月15日～3月24日)

おまじないに用いる呪物やまじないのやり方を記した文書、お札など市内に残る江戸から昭和初めまでの資料を紹介し、当時の人々がどんな願望を持って生活していたのか、災いの原因をどのように考え、いかに防ごうとしてきたのかを考えます。

主な展示物：疫病神の詫び証文、風邪よけのオシシサマ、里修験の装束など

### 【企画展】

#### 1. 維新150年「八王子と明治維新」

(会期：平成30年4月3日～5月27日)

明治維新から150年の節目の年にあたり、動乱の変革期を八王子の人々がどのように生き抜いたか、さまざまな資料から紹介しました。主な展示物：鑓水村御林絵図、千人同心の血判誓紙、武相蚕糸改良協会関係資料など

#### 2. 「戦争と八王子」

(会期：平成30年7月21日～9月24日)

当館では毎年夏に戦争の悲惨さと平和の大切さを後世に伝えるため、テーマを決めて戦争関連の展示を行っています。今年度は戦時下の生活をテーマに展示しました。

主な展示物：慰問袋、戦時中の子ども雑誌、もんぺなど

#### 3. 「七福神 八王子の恵比寿・大黒」

(会期：平成30年12月26日～平成31年1月20日)

八王子七福神めぐりでなじみのある七福神や、おめでたいものを展示しました。

主な展示物：七福神の掛け軸、伝・円空作の大黒天像、お札の版木、おめでたい柄の器など

### 【体験学習・講座】

体験学習や講座は、資料に触れることや体験を通して、郷土の歴史をより身近に感じてもらうことを目的に実施しています。今年度は毎年恒例の子ども向け体験学習「火おこしと縄文土器づくり」や「八王子かるたとお正月あそび」、「まゆ人形作り」、戦争関連講座「八王子空襲と戦時下の生活」のほか、『新八王子市史』刊行にあたっての新たな調査・研究成果を踏まえた歴史講座「歴史資料をひもとく」を開催しました。

また、11月10日には隣接する八王子消防署の「消防まつり」とタイアップして、体験学習「むかしの消防服を着てみよう!」を開催し、市内の消防団で使用されていた刺子半纏や頭巾の着用、龍吐水や消防ポンプを使った放水体験をしてもらいました。当日は気候も穏やかで、親子で協力して水を当てたり、年賀状の写真にしたいと一家そろって刺子半纏を着て記念撮影をしたりと、賑やかな一日になりました。その他、めかご(メカイ)の実演会なども行っています。

今後も郷土の歴史を広く知っていただくために、さまざまな企画・事業を展開していきます。



龍吐水で放水体験

## 平成30年度展示報告

青梅市郷土博物館 鈴木 章久

### ◎企画展「明治時代の青梅—近代化と人々の生活—」

平成30(2018)年は明治元(1868)年から150年目という節目の年であったことから、各地で明治時代に関する展示やイベントが数多く開催されました。当館でも、「明治時代の青梅—近代化と人々の生活—」と題した企画展を平成30年4月24日から7月8日までの会期で開催しました。館蔵資料を中心に、明治時代における青梅地域の行政地域や産業・経済・観光・交通などに関する資料を約100点展示し、中でも明治7(1874)年の神奈川県高札(武蔵御嶽神社所蔵)や、明治27(1894)年と同29(1896)年に撮影された神社・仏閣等の古写真(徳大寺公弘撮影・江戸東京博物館所蔵)など、青梅市として初公開の資料もあり、多くの方々にご来館いただきました。また、企画展の開催にあわせて展示図録も発行しました。



図録の表紙

### ◎企画展「青梅市の板碑～石に込められた中世人の想い～」



「明治時代の青梅」展示風景

板碑(青石塔婆)は、13世紀から16世紀にかけて、日本各地で作られた石製の卒塔婆の一種です。青梅市内では、秩父地域で産出される

緑泥片岩を使用した板碑(「武蔵型板碑」と呼ばれる)が多数確認されており、その数は1500基以上にも及びます。

本企画展は、平成30年7月21日から10月8日までの会期で開催しました。館蔵資料をはじめ、市内各所で保管されて



「青梅の板碑」展示風景

いる板碑や関連資料を約80点展示しました。また、近年発見され、今回が初公開となる板碑も7点展示しました。普段は別々に保存されている多くの板碑が一堂に会する展示は39年ぶりとなりました。

### ◎企画展「青梅市の文化財住宅～民家と町屋のしくみ～」

青梅市内には、国や東京都の文化財に指定されている住宅が5件あり、そのうち、市所有として重要文化財の「宮崎家住宅」など3件、個人所有として有形文化財の「福島家住宅」など2件があります。本企画展では、これらの指定文化財となっている住宅をはじめ、国の登録有形文化財になっている住宅などの写真や図面等を展示し、それぞれの特徴や新たに発見された資料などを紹介しています。会期は平成31年1月19日から4月7日までです。

## 平成30年度檜原村郷土資料館

檜原村郷土資料館 清水 達也

平成30年度の檜原村郷土資料館では平成29年5月に国登録有形文化財に登録された旧高橋家住宅に残されていた物品などの貴重な資料を改修工事が行われる前に保管するため調査と運び出し作業を行いました。

資料館職員2名・役場職員1名・武蔵野美術大学非常勤講師の樋口様と博物館学芸員課程の生徒6名・ボランティア2名の計12名で今回の作業は行われました。

旧高橋家住宅は檜原村役場から西に約13km地点にある人里(へんぼり)地区に所在し旧高橋家住宅の南側を東西に檜原街道が通っています。



旧高橋家 外観

旧所有者である高橋家の来歴は過去帖から享保十三年(1728年)に没した七朗兵衛が初代とされ、現在は11代目となります。代々農家の家系

であったが、7代の榮順(安政2年～昭和11年)は、医者(漢方医)で昭和10年の新聞に籠に乗って往診に向かっているところが掲載されていました、こういったことから周囲の人達から屋号を医者殿(いしゃど)と呼ばれるようになったということです、また10代当主である末雄は日本医科大学理事長などを務めた人物です。

建物は江戸時代末頃に建てられたと思われる頃は養蚕を生業としていたようで2階部分には養蚕で使われていた座繰りなどが残されていました。また7代榮順の頃の物なのか医者殿という屋号に相応しく100冊を超える医学書や薬棚には漢方薬の材料と思われる素材、往診の際に使用していたと思われる旅籠などが残されていて大変貴重な物として完成は2022年頃を計画しており工事が終わるまで資料館にて保管することになりました。



生徒による運び出し作業



## 平成30年度 秋季企画展の活動報告

立川市歴史民俗資料館 漆畑 真紀子

平成30年度の秋季企画展は、「空の都、たちかわ立川飛行場の歩み」と題し、10月23日(火)から12月2日(日)の日程で開催しました。立川飛行場は、1922(大正11)年に建設された旧陸軍の軍用飛行場です。一時期には航空会社や飛行学校など、民間の航空機関にも利用されたりと、立川飛行場の存在は立川の街の隆盛に深く関ってきました。戦後は米軍に接收され、1977(昭和52)年に日本に返還されるまで、米軍立川基地として利用されました。立川基地の返還から40年以上の年月を経た現在、若い世代では立川に広大な飛行場があったことを知らない方もいます。そこで、当館所蔵の資料を中心に、立川飛行場の歩みを振り返るべく本展示を企画しました。

展示は6章立てで、「1 飛行場建設前夜」、「2 飛行場建設と陸軍飛行第五大隊の移転」、「3 空の都、へー民間航空の進出」、「4 戦時色の強まりと各企業の進出」、「5 米軍立川基地へ」、「6 米軍立川基地返還後…」と立川飛行場の歴史を編年で区切り構成しました。出展物で好評だったのが、乙式1型機のプロペラ(1927〔昭和2〕年7月製)で、サイズが長さ276cm×幅24cmと大きく、木製で重量が10.5kgあります。フランスのサルムソン社が開発した戦闘機を、日本陸軍が国産化に着手し生産した機体のもので、来場者はプロペラのハブ(中央)部分にある刻印を熱心にご覧になっていました。また、立川飛行場に訪れた多くの観光客のためのお土産として、1924(大正13)年当時、飛行場の正門付近にあった和菓子店「松栄堂」名物の「飛行羊羹」「飛行最中」の包み紙も目を引いていました。近年、米軍側の資料が公開されつつありますので、米国立公文書館所蔵の立川航空工廠を目標とした爆撃軍団の報告書(複製)も展示しました。展示資料の総点数は約70点に及びました。

本企画展の関連イベントとして、11月25日(日)に立川市女性総合センターの第3学習室において、講演会「立川にあった東京飛行場、一陸軍飛行場から米軍基地へ、そして現在…」を開催しました。

講師には、長年、立川飛行場について多角的に調査研究されている榎崎茂彌氏(多摩地域の戦時下資料研究会)を迎え、数多くの歴史資料を用いて、立川飛行場の成り立ちから丁寧に分かりやすく解説していただきました。20代～80代までの約50名の聴講者が、講師のお話に興味深く聞き入っていました。

また、展示会場ではギャラリートークを3回実施し、約20名のご参加をいただきました。参加者は、幼いころから立川基地を間近に見てきた60代～70代の立川市民の方が多く、ご自身の記憶のなかの飛行場を思い起こしながら、説明を聞かれていました。

今回の企画展を通し、来場された方とお話するなかで、とても関心のあるテーマであることが分かりました。かつて砂川闘争という立川基地拡張反対運動がありました。なぜ基地拡張計画が発表されたのか、その背景などを知らずにいたという方も多くいらっしゃいました。立川飛行場、という、立川の歴史を鑑みれば比較的新しい身近なテーマではありましたが、記憶にある事柄を正しく理解することの意義を感じました。今回の展示では、立川市域の空襲や砂川闘争に関して詳細は触れられませんが、引き続き関連資料の収集など調査をすすめ、別の機会に還元していきたいと思えます。

次年度も、より多くの方に興味や関心をもっていただけるような企画事業の展開に努めていきます。



講演会



ギャラリートーク

## 火星大接近と部分日食

コニカミノルタ サイエンスドーム(八王子市こども科学館) 森 融

平成30年7月には2年2カ月ごとに巡って来る火星接近があり、特に今回は15年ぶりに距離が近い大接近になりました。最接近の日も夏休みに入った7月31日と普及にはもってこい。

まず、7月7日からパネル展「火星大接近と西郷星」を開催しました。火星接近の原理や火星探査の歴史や未来について解説し、エピソードが多かった1877年の火星大接近についても紹介しました。1877年の大接近は西南戦争の最中で、火星は西郷星と呼ばれ、何種類もの錦絵が発行され、今回はそのうちの1枚を展示しました。最接近の7月31日には星空観望会を計画しました。例年、夏休みには土曜日に3回開催している星空観望会ですが、一回を最接近の7月31日(火)としました。

当日、最初の30分間のプラネタリウムでの事前学習は開始時間前に200名以上の満席になり、その後も続々と参加者は続き、あとは火星が昇るのを待つだけになります。

大接近は太陽、地球、火星が一直線になることでもあるため、日没時に火星が昇り、観望開始の19時にはまだ高度が低く、ちゃんと見えるかどうか心配のタネです。屋上からならば心配はないのですが、夏休みは参加者が多いため、屋上は止めて、正面玄関前で観望することにしました。ところが正面玄関前では火星が昇る南東方向に保健福祉センター(4階建)があるので、少し離れた第二駐車場に火星用の望遠鏡をセットします。

観望対象は火星以外に、衛星も見える木星、リングが見える土星、宵の明星で明るく輝く金星も見え、観望対象がありすぎて困る状況で、天体望遠鏡各一台ずつで各惑星を狙います。

事前学習が終わると、望遠鏡の列は一気に長くなり、順番にのぞいていただきながら解説をしたり、質問に答えていきますが、列は一向に途切れません。

火星は予測したとおり、大気の影響を受けてユラユラした状態で、

すっきりとは見えませんでした。お客様が全員見終わったのは22時前で、参加者は404名。近年にない参加者数となりました。

年が明けて31年1月6日午前には部分日食が起こり、こちらも観望会を計画しました。次の日食は31年12月26日(木・冬休み)、その次は32年(2020)6月21日(日)と短い期間に3回連続の日食も珍しいのですが、3回とも学校が休みの日に起きる部分日食と普及にはもってこい。そして3回の次は八王子では2030年6月(北海道で金環日食)まで10年間日食が見られないということで、日食の原理やこれらのことの解説も正面玄関前に掲示して観望会に臨みました。観察方法は7年前の金環日食観望会の経験をもとに、天体望遠鏡、日食メガネの他にピンホール観察器や鏡での投映も準備しました。

ところが当日は、前日までの快晴と打って変わって雲が多く、太陽

は流れる雲の合間に顔を出す程度。それでも太陽が顔を出すと歓声が上がリ、日食メガネやピンホールでも欠けた太陽を観察することができました。

参加者は197名でした。



## 「学芸員養成課程展示室・実習室」2018年度の活動

首都大学東京 91年館(学芸員養成課程展示室・実習室) 土屋 健俊・加藤 早百合

当館は平成24年に展示施設として利用を開始しました。名称のとおり、本学における学芸員養成課程科目の講義や、館園実習に先立つ学内実習「博物館実習Ⅰ」が開講されています。

また、展示室も併設しており、大学の授業期間中には常設展をご覧頂けます。

今年度は、常設展の一部展示替えと、昨年度に引き続き実習成果展示の開催を行いましたので、ご紹介します。

### 考古学分野の展示替え

当館は日本史、動物学、植物学など、全7分野の展示を行っています。今まで、分野内の一部の展示替えはありましたが、分野全体にかかる展示替えは行っておりませんでした。それがこの度、山形県天童市にある西沼田遺跡公園より、古墳時代の復元織機などを譲って頂けることになり、これに併せて、考古学分野の展示を一新することにしました。

旧来の展示では実験考古学の観点から、復元石斧での樹木伐採などについて取り上げていましたが、新展示では、実験考古学の観点そのままに、「縄文土器の太鼓」「弥生時代の琴」「古墳時代の織機」(全て復元)を扱っています。

太鼓や琴は言うまでもありませんが、機織の時にもトンカカリと音がたち、古墳時代の村々にはこの織機の音が響き渡っていたのではないかと、このような「音」を介して、原始・古代の人々の生活に思いをはせて頂こう、と考えています。



新たに展示する機械織機

なお、織機を頂いた時の様子は、西沼田サポーターズ・ネットワーク様のブログの12月14日の記事「西沼田の地機東京に嫁ぐの巻」で取り上げて頂きました。織り方をレクチャーして頂いた際の写真などもありますので、是非ご覧下さい。

### 実習成果展示

今年度も、学内実習「博物館実習Ⅰ」において、学生たちが展示制作に挑みました。そのうち民族学を扱った班の成果を実習成果展示として、昨年度に引き続き学内外の皆様へ公開しました。

ケニアの農村で使用された椅子から、それが①三本足であることから「3」、②持ち運びのできることから「携帯」、③特定の年代層のみが使用したことから「Personal Heritage(わたし遺産)」と、学生たちは三つのキーワードを抽出、そこから連想を広げ、展示物の収集や解説の執筆などを行いました。

制作に参加した学生にとっては、貴重な経験ができたのではないかと考えています。

本展示室は、キャンパスの最西端にあり立地の面からもなかなか目立たず、学内での知名度もさほど高くありませんが、実習内容や展示を充実させていくことこそが課程展示室として大切だと信じ、今後も活動してまいります。



実習成果展示の様子

# 平成30年度 展示活動報告

福生市教育委員会教育部生涯学習推進課文化財係 田中 愛誠

福生市郷土資料室では、年間を通じてさまざまな企画展示・特別展示を開催しています。ここでは平成30年度に開催した展示活動の中から、企画展示「旧ヤマジユウ田村家住宅資料展」、特別展示「歌舞伎を描いた明治の錦絵」の2つの展示をご紹介します。

## 1 企画展示「旧ヤマジユウ田村家住宅資料展」

会期：平成30年4月21日～平成30年7月8日

ヤマジユウ田村家は、明治35年（1902）に市内で田村酒造を営む田村家の分家として興りました。屋号を 今（ヤマジユウ）と称し、主に通信事業を営み、福生の発展に貢献しました。

平成25年に所有者から主屋と土蔵2棟を含む、民具、古文書などが市に寄贈されました。これを受けて、平成26年から平成28年の3年間にわたり、文化財総合調査の一環として旧ヤマジユウ田村家住宅の調査が実施されました。



「旧ヤマジユウ田村家主屋」外観

本企画展示ではこの結果を踏まえて、建造物の建築や遷移を明らかにする「棟札」や「瓦屋根葺替工事覚」などの古文書をはじめとして、通信業で使用されていた業務記録簿や道具類、生活や冠婚葬祭で使用された膳碗等の生活用具など、旧ヤマジユウ田村家住宅の成り立ちや当時の生活を知ることができる資料、約90点を展示いたしました。

また、関連事業として、横浜国立大学大野敏教授による古民家解説会、日本民俗学会会員神かほり先生による民具資料解説会、文化財と史跡ガイドボランティアによるガイドツアーなども開催し、地域の歴史にご関心をお持ちの多くの方にご参加いただきました。



通信業に関する資料展示

## 2 特別展示「歌舞伎を描いた明治の錦絵」

会期：平成30年9月22日～平成30年11月25日

本特別展示では、迫力あるタッチで描かれた、色鮮やかな三枚続の錦絵をはじめとして、芝居小屋のしきたりを描いた「大江戸芝居年中行事」など質の高い作品を選びすぐり展示いたしました。

市内で酒造業を営む石川家には、多数の文書や書簡類が保存されています。この中には高い技術を持った豊原国周の作品をはじめとして、美しい明治期の錦絵が数多く残されています。また、これらに本展示を監修いただいた中央学院大学非常勤講師安田吉人先生のコレクション、福生市郷土資料室資料をあわせて100点を展覧いたしました。

また、安田吉人先生には特別展示記念講演会もお引き受けいただきました。役者絵の歴史や見方をわかりやすい言葉でご解説いただき参加者から大変な好評を博しました。

今後とも、ひとりでも多くの方に足を運んでいただけるように、さまざまな展示、事業に取り組んでいきたいと考えております。



特別展示「歌舞伎を描いた明治の錦絵」展示風景



豊原国周「八百屋お七」

## 平成30年度くにたち郷土文化館の企画展について

くにたち郷土文化館 安齋 順子

くにたち郷土文化館では平成30年度の企画展として下記の4展示を行ないました。

- (1) ミニ展示「関頑亭～谷保から国立へ～」  
5月26日～6月24日(日)
- (2) 夏季企画展「第22回紙の工芸展」  
8月18日(土)～9月9日(日)
- (3) 秋季企画展「本田家と江戸の文人たち」  
10月27日(土)～12月9日(日)
- (4) 冬季企画展「むかしのくらし展」  
1月14日(月・祝)～3月11日(月)

(1) は、市内在住の芸術家関頑亭氏の白寿を記念して行ないました。同時期に、たましん歴史・美術館で開催されていた「99歳の芸術家関頑亭一声字実相義 耳で見つめ、目で聴く」(3月27日～7月1日)とも広報面などで協力しあうなど、連携を試みました。

(2) は、2年に一度、紙の工芸展実行委員会と、くにたち郷土文化館の共催により行われているものです。また実行委員会の先生方より紙を使った10回の体験教室を開催。

(4) は、小学校3年生の民具案内に関連し毎年行なっているものです。電気の無い頃から電化製品が出てくる頃の暮らしの移り変わりをテーマとし、民具を展示しています。また、コーナー展示として「おめでたい! 吉祥文様」として、婚礼衣装や、器などにみられる文様を紹介しました。

平成30年度の展示の中で一番規模の大きな展示は、国立市教育委員会と共催した(3)です。今回展示を行なうことになったきっかけとしては、平成28年に、本田家住宅敷地及び主屋・薬医門、そして所蔵資料が本田家の現当主、本田啄夫(たかお)様より国立市へ寄贈されたことが挙げられます。また、国立市教育委員会では平成23年

度より7年間、本田家の方々のご協力をもとに本田家主屋や蔵の資料調査を行ってきました。展示では、これらの調査結果から、本田家10代当主本田昂斎を中心に本田家の文人としての側面にスポットを当てました。

昂斎は若くして江戸の市河米庵の書塾に入門、また漢詩は府中宿馬場「四人部屋」の主人野村瓜州と、当時有名な江戸の漢詩人、菊池五山の下で学んでいます。本展では、本田家に伝えられた資料から、本田家と江戸の文人との繋がりや、多摩の人々との繋がりを中心に紹介しました。

寄贈された本田家資料は約7万点におよびます。これまで行われてきた調査は、全体を把握し目録化するために行なわれたものであるため、今後これらの貴重な資料を保存・活用していくためには、さらなる調査・研究が必要となっていきます。地域を越え名主として、医者として、文人として、多岐にわたる活動がみられる本田家の調査には、他地域の博物館との情報交換や、医学・漢詩など個々の分野に関わる研究者との繋がりを持ち、地道な研究を継続的に行なうことが必要であり、その継続的な調査・研究のもと、今後も多くの方に展示や講座等を通して資料が活用されるよう活動していきたいと思えます。

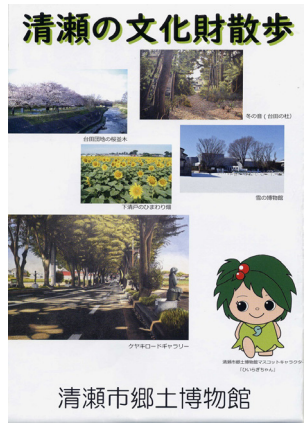


「本田家と江戸の文人たち」展示風景

## 平成30年の活動報告

清瀬市郷土博物館 中野 光将

清瀬市郷土博物館では、これまであまり試みてこなかった歴史系の展示や事業を開催しました。1つは、新しく改訂された「清瀬の文化財散歩」を片手に市域の知られざる歴史を訪ねる「清瀬の文化財散歩ロマンと伝説と信仰の山を巡る旅」です。この事業は5月12日に開催しました。「清瀬の文化財散歩」には、清瀬の歴史と自然を歩いて巡るように全4コースを地形の高低差をつけて掲載しており、それを基本的に午前中をかけて市内を探索し、また、昼食には、清瀬式の手打ちうどんを提供し、食の面からも清瀬の歴史を体験してもらいました。まだ残っているコースを中心に今後も清瀬の文化財巡りを行っていくつもり



です。

もう1つは、現在でも活動している富士講の1つである丸嘉講武州田無組中里講社(以下、中里講社)にスポットをあてた「清瀬の富士講—清瀬から富士を目指した人々—」を8月11日(土)～9月2日(日)にかけて開催しました。

そもそも、丸嘉講武州田無組は、多数の村々の丸嘉講を合わせて1つの連合体である「田無組」を作りまとまっています。

最盛期には、現在の北多摩地域を中心に、練馬区、さらには埼玉県所沢市、新座市に分布していました。ただし、現在活動しているのは清瀬市の中里講社・東久留米市の下里講社、落合講社のみです。

特に、当市の中里講社が築造した富士塚、その富士塚で9月1日に行われる火の花祭り、さらに当館には、富士講に関する文書が寄託されており、これらは、東京都の指定文化財であり、当時の富士講を知る上で貴重な資料となっています。

本展覧会では、当館で寄託されている文書・道具を中心に、他の

地域の富士講の資料や、あるいは現在でも中里講社が富士山登拝の際に宿泊する山梨県富士吉田市の御師上文司家のご協力などを得て、様々な資料を紹介し、清瀬から富士へ目指した人々の軌跡をたどりましました。さらに、平成30年5月に丸嘉講田無組が北口本宮富士浅間神社に奉納神楽を行った際には、取材を行い、本展覧会ではその映像を流し、これまであまり知られていない富士講の一側面も紹介しました。展覧会以外にも、関連イベントとして9月1日に行われる火の花祭に飾る燈籠のミニチュア作り、火の花祭の事前レクチャー、あるいは記念講演会を開催し、様々な人々に清瀬の富士講を知ってもらう機会を設けました。

今回、清瀬の富士講である中里講社を紹介しましたが、最盛期と比べ講員の数は少なくなっています。貴重な文化財を後世に残すためにも、他地域における富士講の活用事例を参考にするとともに当館で寄託されている文書・道具を展示や講座等で活用することや、実際に

中里の富士塚へ登るイベントなど、様々な形で多くの方に清瀬の富士講を知ってもらえるような活動をしていきたいと思ひます。



## ICUに残る松浦武四郎の書齋「一畳敷」

国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館 具嶋 恵

東京都三鷹市の自然豊かなキャンパスにある当館は、国際基督教大学 (ICU) 初代学長であった湯浅八郎 (1890-1981)の大学創設・育成に対する貢献を記念して、1982年6月に開館した博物館です。大学の一施設ですが、展示室・資料室はどなたにも無料で公開しています。主な収蔵品は、湯浅博士が蒐集した各地の民芸・工芸品、およびICU構内に散在する遺跡から出土した旧石器時代と縄文時代の考古遺物です。その他、美術品や歴史資料もあわせて展示・紹介しています。

常設展示に加え年に3回、収蔵資料を様々な切り口で紹介する特別展をおこなっています。平成30年度は、漆器の提重や弁当箱の収納の工夫をご覧いただく「携帯の形・ひらく弁当箱」(4月10日～7月6日)、藍染の織物や印判手と呼ばれるやきものなど、型紙を使って絵柄をほどこした品を展示した「型染と印判手」(1月8日～3月8日)の2つの企画のほか、幕末明治に活躍した探険家・松浦武四郎生誕200年を記念して、武四郎が晩年を過ごした書齋を紹介する「ICUに残る一畳敷」(9月11日～11月9日)を開催しました。

その名のとおおり、たった一枚の畳に板縁を廻らせ、床の間と神棚、書棚をしつらえた「一畳敷」は、武四郎が各地の由緒ある社寺や歴史的建造物の古材を組み上げ自宅に増築した非常にユニークな建物です。自らの死後は取り壊すようにという遺言に反して、この書齋はその後、松浦家から紀州徳川家へ、さらに財閥の重役や飛行機会社社長へと受け継がれ、神田から、麻布、代々木上原、そして1930年代には現在の三鷹の地へと3度の移築を重ねました。現在、戦後この一帯を開学の地としたICUが一畳敷の最後の所有者として保全に努めています。特別展では、関東大震災や東京大空襲を免れ奇跡的に生き延びたこの貴重な建築を写真パネルや文献資料で解説したほか、精巧な原寸模型を設置し特異な室内を体感していただく試みをおこないました。

展覧会に付随する催しとして、会期中の10月6日にはシンポジウム「一畳敷の世界を探究する」を開催、国内外の日本近代史の研究者に一畳敷の歴史的文化的重要性を語っていただき、300名収容の会場

が満席となる盛況ぶりでした。シンポジウムの模様は国際基督教大学ウェブサイト ([http://ocw.icu.ac.jp/sl/sl\\_20181006/](http://ocw.icu.ac.jp/sl/sl_20181006/)) でご覧いただけます。また本展の開催にあわせ図録書籍『一畳敷 松浦武四郎の書齋』を刊行しています。

そのほかの特別展においても、ICU教員や各分野で活躍される専門家による公開講座を企画、毎回たいへんご好評をいただいています。いずれも聴講は無料で、学内外を問わずどなたでも参加できます。地域に開かれた大学博物館として、今後も多くの方に楽しんでいただけるよう、幅広い活動をおこなっていきたく考えています。



## 年中行事を学ぶ—子どもはくぶつかん「正月のしめ飾りをつくろう」—

調布市郷土博物館 土井 昭穂

調布市郷土博物館では、12月27日に「子どもはくぶつかん『正月のしめ飾りをつくろう』」を開催しました。しめ飾り作りを通して、年中行事や生業にかかせない技術であった縄を織う作業や正月の習俗を、子どもたちに体感的に学んでもらうという趣旨のもと、約30人が参加しました。

本事業に向けて、当館では仕込みから手作業でワラ細工用のワラを準備しています。

長野県から取り寄せた原料の稲ワラを、まずワラスグリを使ってハカマ（下葉）部分を除いて茎のみ残します。そして次に、ワラの選別作業を行います。一番青いものを輪飾り用に、なるべく青みが濃いものを玉飾り用に分け、黄色味が残るものは縄織いの練習用にとっておきます。その後、市内の教育施設である深大寺水車館の水車のつき白を利用してワラ叩きを行います。前日には水を打っておき、叩くうちにワラが切れてしまわないように気を付けています。後は、黄色くならないように前日まで日陰に置いておき、前日には軽く水を打っておいて、ワラの準備は完了です。そのほか、飾り付け用に御幣やユズリハ等を用意します。



当日は、正月飾りの由来・事例を紹介し、ワラ

を織う練習から始め、輪飾り・玉飾りを作りました。ワラを織うのは力があるため、子どもの小さな手では作業が難しい様子も見られましたが、親子での参加としていたためうまく大人が補助し、参加者全員が仕上げることができました。作ったしめ飾りは持ち帰りとしたので、手作りのしめ飾りを飾って過ごすお正月を体験できたと思います。

本事業のこだわりは、調布市内の事例を紹介し、形や飾り付けは市内でつくられていたものにならない、講師は地域の方をお招きしている点です。子どもたちが郷土愛を育めるよう、調布市の博物館ならではのイベントにしました。子どもたちが一生懸命ワラを織いしめ飾りを作っている姿から、地域の伝統が継承されていく様子が感じられました。

当館では子どもを対象とした体験事業「子どもはくぶつかん」を1年を通じて実施しており、年末に行うしめ飾り作りはそのひとつです。しめ飾り作りの事業は開館当初から行っており、毎年人気も高く、当館では欠かせない活動になっています。



## 特別展「日野の自然～鳥とともに～」の開催

日野市郷土資料館 白川 未来

特別展「日野の自然～鳥とともに～」では、剥製やバードカービング、写真、鶺鴒漁関連資料、鳥の足跡化石など多様な題材で鳥を紹介し、人と自然との関わりを考え、生き物や自然環境の大切さを伝えます。当館を含む市内の3会場を10月～3月に巡回する特別展で、このような方法は当館初の試みです。

「日野の自然～鳥とともに～」と題したように、日野で見られる鳥を紹介する自然系の展示だけでなく、人との関わりにも焦点を当て、歴史的な要素も加えました。例えば多摩川で鶺鴒漁を行っていた料亭「玉川亭」の食器、鶺鴒漁の引札や、多摩丘陵の霞網猟について記した書籍などを展示しました。今回は概要紹介に留まりましたが、これらは、多摩地域に共通する話題です、今後より深めて近隣の情報も収集していきたいです。

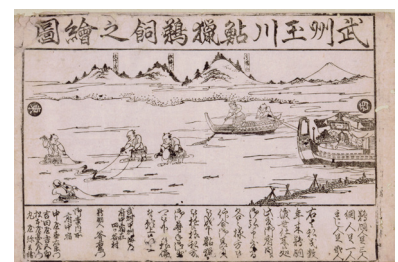
また、日野の特徴を出すために、鳥の保護施設も取り上げました。多摩動物公園や環境省水鳥救護研修センターといった施設が、鳥の繁殖や油汚染事故からの救護などといった、役割を果たしていると伝えました。そして、市民団体の冊子の閲覧コーナーも設置して、鳥を保護する市民の取り組みも紹介しました。

展示や関連事業の開催にあたっては、地域で活躍する市民の協力が欠かせませんでした。丹念にかつ長期間に渡る野鳥調査や、生き生きとした鳥の姿の写真は努力の賜物です。宝物ともいえるそれらの成果を、来場した市民に広める機会となりました。

郷土資料館以外の会場となる、「平山季重ふれあい館」と「カワセミハウス」は市の複合施設です。資料館では剥製やバードカービング、絵図や古文書類の展示も可能ですが、他の会場はパネル展示です。内容は縮小してしましますが、長期間にわたり、複数の会場で展示を行うことで、日頃関心のない方にも目にとめていただく機会となりました。

それぞれの会場の特性や季節にあわせて、観察会や講演会を企画しました。平山季重ふれあい館内の平山図書館では、展示にあわせて、鳥の書籍コーナーや、子どもたちのおすすめの本を掲示できるコーナーを設置して、来館者が楽しめる工夫を図書館職員が考えました。環境情報センターとして機能しているカワセミハウスは、環境の関心の高い市民の来館も多く、都市鳥についての講演会を展示開催期間に企画しました。

小規模な展示ですが、方々でまいた種が広まって、鳥にも人にもやさしい地域づくりにつながっていけば幸いです。



武州玉川鮎鶺鴒漁之絵図

## 連続講座「郷土史と科学から見る地域の防災」を開催

多摩六都科学館 原 朋子

多摩六都科学館では、平成30年11月に「郷土史と科学から見る地域の防災」というタイトルで、講義とフィールドワークからなる連続講座を開催しました。

よく「古くからの神社や寺院は災害に強い場所に建っている」と言われますが、その根拠まではあまり明らかにされません。今回講師を務めていただいた国立研究開発法人防災科学技術研究所の増田和順先生は、地形・地質といった科学的な情報とその土地がどのように使われてきたかという郷土史資料から読み解いた情報とを合わせた「郷土史防災」という視点で研究に取り組まれています。講義では、中世の神社・寺院は城としても機能する場所だったため周辺の川や湿地帯に比べ高い位置に建てられていたこと、昔の地形は大型重機が使われるようになった高度成長期以降に大きく変えられていること等を、土地条件図やハザードマップと合わせて解説していただきました。

その後行ったフィールドワークでは、西武新宿線東伏見駅を起点に、駅の南側の氷川神社、下野谷遺跡公園、東伏見稲荷を経て西武柳沢駅に至るまでのコースを廻りました。武蔵野台地の中央部に位置する西東京市ですが、石神井川を挟んだエリアは土地の高低差が大きく、大雨による水害発生の恐れがある場所です。講義で得た昔の土地利用や災害に強い地形の知識をもとに実際にフィールドを歩くと、いつもは気に留めない地形の特徴や、土地の使われ方から読み取れる情報の



大きさがよくわかり、驚く参加者も多かったです。下野谷遺跡公園では西東京市の学芸員の方から周辺で出土した縄文時代や中世の遺跡群について解説していただきましたが、高台にある遺跡公園から辺りを見回すと、昔の人々が自然の地形の特性を知り、それに適った使い方をしていたことが実感できました。他にもこの企画では地元の防災ボランティアグループの協力を得て、地形と史跡の関係に加え、現在の防災の体制や課題について考えるいい機会となりました。

郷土史という科学館とは縁の薄い言葉のに入った教室だっただけに、実施側も手探りで企画でしたが、地元西東京市周辺を中心に北多摩の広い範囲から多くの参加がありました。日ごろから科学館に来られている方から、科学館に来るのは初めてという郷土史・防災というキーワードに興味をもって参加された方まで、様々な興味・バックグラウンドを持った方々が集まり交流できたことで、学問分野にとられないもの見方や、新たな興味のきっかけが生まれたようです。また、防災という生活に密着した課題から、ふだんは切り離している異なる分野の情報を統合して考えることの重要さも実感できました。参加者から、ぜひ自分の住む地域でも開催をという声が多く寄せられたので、他館との連携も視野に入れて今後の取り組みを考えていきたいと思います。



## 学校教育との連携 - 平和学習と資料館分館の活用 -

武蔵村山市立歴史民俗資料館 堀部 由美子

当資料館において代表的な小学校等の連携事業といえば、小学3年生の社会科見学が挙げられます。

この社会科見学では、3年次に予定されている「昔の暮らしの道具」について学ぶカリキュラムに合わせ、例年2月頃、市内小学校の3年生が来館し、館内の常設展示の見学とテンビンボウやイシウス、トウミなどの民具資料の体験学習を行います。

しかしながら、このテーマ以外でも市内小中学生に資料館を積極的に活用してほしいとの考えがありました。

平成28年9月25日、東京陸軍少年飛行兵学校跡地内である市内大南地区に、平和学習の場として歴史民俗資料館分館が開館しました。

夏休み期間中に市内の小中学生を対象に（保護者同伴の場合もあり）実施される、秘書広報課主催の平和学習バスツアーでは、分館が開館する平成28年度から、資料館職員が協力し、ツアー内で武蔵村山市内の戦争遺跡についての解説や分館常設展示の案内を行いました。

このツアーの参加者からは、「教科書などで学ぶ悲惨な戦争が他人

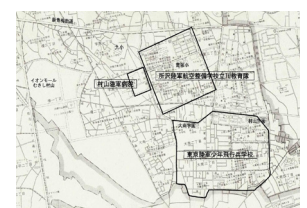
事ではなく、自分たちが住んでいるこの武蔵村山でも、当時様々な被害があったのだということをはじめて知った」との感想が多く寄せられました。

市内には、東京陸軍少年飛行兵学校のほか、所沢陸軍航空整備学校立川教育隊、村山陸軍病院などの軍事施設が存在しました。特にこれらの施設周辺に位置する小中学校において、平和学習に積極的に分館を活用してもらえよう、学校向けの見学プランの提案の重要性を感じています。

現在、文化財を見学する「歴史散策コース」を見直す中で、分館周辺の見学ポイントの設定も検討しています。



平和学習バスツアー（資料館分館見学）



戦争遺跡と小中学校の位置

# 平成30年度活動報告

町田市民文学館ことばらんど 神林 由貴子

## ■はじめに

町田市民文学館ことばらんどは、1997年に作家・遠藤周作の資料をご遺族から寄贈されたのがきっかけとなり、〈文学の魅力やことばの力に出会う場〉、〈文学を通じた市民の新たな交流拠点〉を目指す総合文学館として2006年に開館しました。開館以来、町田ゆかりの作家、文学・ことば、絵本や児童文学に加え、マンガや映画などのポップカルチャーなど多様なジャンルを取り入れた展覧会を年4回開催しています。また、〈ことば〉や〈文学〉に関わる大人向けの講演会や講座、〈文学〉の入り口となるわらべ唄を中心とした乳幼児向けのおはなし会や、戸外に出かけて俳句を作る小学生対象の俳句教室など、子どもたちが気軽に文学に親しめる事業にも力をいれています。

## ■展覧会事業

今年度は3回の無料展と1回の有料展を開催しました。年間を通して日本の文学・文化の良さを再認識してもらえるよう、〈童謡とわらべ唄〉、〈絵本〉、〈マンガ〉、〈小説〉というテーマを設定しました。春は「童謡とわらべ唄—北原白秋から藪田義雄へ」展、夏は「館野鴻絵本原画展『ぼくの昆虫記—見つめた先にあったもの』」、秋は「みつはしちかこ展 一恋と、まんがと、青春と—」、冬は「世界の果てで生き延びる—芥川賞作家・八木義徳展—」を開催しました。夏休み期間中には沢山の家族連れが訪れ、夏季展の入館者は1万人を超えました。また、町田ゆかりの人気漫画家・みつはしちかこ氏を紹介した秋季展では、沖縄や北海道を含む



「みつはしちかこ展」の様子

全国45都道府県からご来場いただき、有料展では開館以来最高の入館者を記録しました。

## ■教育普及事業

当館では教育普及事業を展覧会事業からは独立した事業として位置づけ、〈文学の魅力を伝える〉、〈ことばや文字の面白さを伝える〉、〈市民との協働をすすめる〉を軸にライフステージに応じた事業を実施しています。今年度はさらに、新たな参加者の獲得と新たなニーズへの対応を課題として事業を企画しました。2019年1月に実施した作家・町田康氏による講演会「残響を聴く～町田康が語る朔太郎と中也のことば～」は幅広い年代の関心を集め、文学館を知っていただく好機となりました。また参加型事業への要望に応えるため、連句や短歌、小説の実作講座を実施。〈ことば〉を通じて日本文化を紹介する講座として能の体験教室、百人一首カルタ会なども開催し、子どもからも大人からも好評をいただきました。

## ■おわりに

当館は開館から12年を経ましたが、知名度が高いとはいえません。そこで当館の事業内容を知ってもらい足を運んでもらえるよう、一昨年からTwitterを活用して展覧会情報や教育普及事業の実施予告、報告などを発信しています。情報が溢れ、ニーズが多様化する昨今、当館がより多くの方から選ばれる文学館となるために、一層の企画内容の充実を図り、文学の魅力伝えていきたいと考えています。



百人一首カルタ会の様子

## 「まちだ今昔 時空を超えた対話；縄文ムラと商都～」展の開催について

町田市立博物館 佐久間 かおる

町田市立博物館では、7月9日から9月17日までの夏休み期間において、町田市が誕生した昭和30年代にスポットを当てた展覧会を開催しました。本展では、その頃の商都町田や人々の暮らしの姿とともに、開発に伴う発掘調査が明らかにした原初の町田の姿を、博物館所蔵民俗・考古資料と教育委員会所蔵の考古資料を使用してご紹介しました。

今夏は複数の博物館でも縄文時代を取り上げた展覧会が多く開かれ、本展にも多くの縄文時代に興味のある老若男女の方々のご来館いただけました。実際に触ることができる土器片を用意したことで、その質感などを感じることが出来たと好評を得ました。また、近代と縄文時代の「つくる」「たべる」「あかり」3つの用途の道具をそれぞれ並べ、「ちょっと昔と、とても昔の道具をくらべてみよう」というコーナーを設けました。縄文時代にはスマートフォンやIHキッチンなどはありませんが、日常生活を送る上で必要な道具の形は、使いやすさや飾りが増えたことを除けば、1万年以上前から現代において大きな変化がないことがわかる展示としました。

今後も町田の郷土資料を使用した魅力ある博物館事業を継続して取り組んでいきます。





# 平成30年度活動報告

パルテノン多摩歴史ミュージアム 仙仁 径

パルテノン多摩歴史ミュージアムでは、平成30年に連携展示など、計5回の展示を開催しました。また、例年通り古文書講座や植物観察会などの講座事業も実施しました。ここでは、3つの展示事業について報告いたします。

## ■連携展示「ニュータウン誕生～千里&多摩ニュータウンの都市計画と人々～」

当館は日本最大級のニュータウンである多摩ニュータウンに立地していますが、近年はニュータウンをテーマとした大規模な展示は開催していませんでした。今回は大阪にある日本初の大規模ニュータウンである千里ニュータウンに立地する吹田市立博物館、および吹田市立千里ニュータウン情報館と連携し、大阪と東京で大規模ニュータウンが建設されるに至った経緯や、二つのニュータウンの比較など、多角的な展示を行いました。多摩と吹田で複数回の打ち合わせを行い、展示内容等を詰めていきました。異なる組織に属する複数の学芸員や市民が関わることになり、調整に苦労する場面もありましたが、展示では、吹田市立博物館学芸員が収集したイギリス等海外のニュータウン関連資料やバスオール（家庭用ユニットバス）など貴重な資料を多数展示することができ、単独開催の展示と比べてより深みのある展示となりました。また事前調査では、多摩ニュータウン開発に関わった方々による談話を映像として記録することができ、多摩ニュータウンの開発についてあいまいに理解していたことや、新たな事実などが明らかになりました。それらの成果は今後常設展示にも活かしていきたいと考えています。なお、本展示は多摩での開催後、さらに吹田市でも同じタイトルで開催されました。

## ■多摩市立図書館連携展示「調布玉川惣画図を歩く ともぬしの多摩名所案内～多摩市立図書館コレクションから～」

平成30年度はさらに多摩市立図書館と連携した展示も開催しました。これまでも両館で協力し合っていましたが、今回は資料の借用だけでなく、図書館で担当学芸員による講演会を開催するなど、より連携した展示となりました。また、今回初めての試みとして、ミニ劇場「ともぬしの展示案内」を開催しました。多摩市立図書館長の提案により実現したイベントで、調布玉川惣画図の作者・相澤伴主に扮した多摩市在住の俳優が、クイズも交えて展示内容を紹介しました。4回の

公演はいずれも立ち見が出るなど好評で、幅広い世代の方楽しんでいただくことができ、展示に対する敷居を下げる契機になったのではないかと感じています。

## ■企画コーナー展示「瓜生・貝取と谷戸の暮らし～「多摩暮らしの調査団」の活動成果から～」

当館の市民ボランティアグループの一つ、多摩暮らしの調査団のメンバーが、平成28年（2016）より多摩市の瓜生・貝取地区で地域の方々に聞き取り調査を行い、その成果を展示しました。関連事業として、ミュージアムシアター公演「昭和の暮らしスケッチ～多摩編 ケヤキと丘を見つめて」と、民俗学講座「瓜生・貝取で民俗学さんぽ」を開催しました。ミュージアムシアター公演は、博物館で活動している団体、ミュージアム・シアター・ワークショップのメンバーが、展示や聞き取り調査の内容をもとにオリジナルの脚本を制作しました。担当学芸員も参加した複数回の打合せで、主人公については生年以外も細かく設定し、リアリティーのある脚本ができました。また、イベントは二部構成とし、前半は寸劇、後半は観客から各個人の記憶を引き出して、その一場面を劇で再現するワークショップをおこないました。参加者も積極的に参加して下さり、民俗学の魅力や、個人の記憶の大切さなどが伝わったのではないかと自負しています。



連携展示の会場風景

## 東京都三多摩公立博物館協議会 会員名簿

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺線「東村山駅」西口下車徒歩8分
府中市郷土の森博物館	府中市南町6-32	042-368-7921	京王線・JR南武線「分倍河原駅」から健康センター行きバス「郷土の森」下車すぐ
町田市立博物館	町田市本町田3562	042-726-1531	小田急線・JR横浜線「町田駅」から藤の台団地行きバス「市立博物館前」下車徒歩7分
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町1-684	0428-23-6859	JR青梅線「青梅駅」下車徒歩15分
調布市郷土資料館	調布市小島町3-26-2	042-481-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車徒歩5分
瑞穂町郷土資料館 けやき館	西多摩郡瑞穂町大字駒形富士山316-5	042-568-0634	JR八高線「箱根ヶ崎駅」東口下車徒歩20分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原5	0428-86-2731	JR青梅線「奥多摩駅」から小河内方面行きバス「奥多摩湖」下車
福生市郷土資料室	福生市熊川850-1	042-530-1120	JR青梅線「牛浜駅」東口下車徒歩7分
武蔵村山市立歴史民俗資料館	武蔵村山市本町5-21-1	042-560-6620	多摩モノレール「上北台駅」から武蔵村山市内循環バス三ツ木地区会館行き「村山温泉かたくりの湯」下車徒歩1分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市920-1	042-596-4069	JR五日市線「武蔵五日市駅」下車徒歩17分
羽村市郷土博物館	羽村市羽741	042-558-2561	JR青梅線「羽村駅」西口下車徒歩20分/コミュニティバスはむらん羽村西コース「郷土博物館」下車
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸2-6-41	042-493-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口下車徒歩10分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町3-12-34	042-525-0860	JR中央線「立川駅」南口から新道福島行きまたは富士見町操車場行きバス「団地西」下車徒歩5分/JR青梅線「西立川駅」下車徒歩15分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村3221	042-598-0880	JR五日市線「武蔵五日市駅」から小岩行か藤倉行きバス「資料館前」下車
日野市郷土資料館	日野市程久保550	042-592-0981	京王線・多摩モノレール「高幡不動駅」から百草団地方面行きバス「高幡台団地」下車徒歩5分
小金井市文化財センター	小金井市緑町3-2-37	042-383-1198	JR中央線「武蔵小金井駅」北口からココバス北東部循環⑩「小金井公園入口」下車徒歩5分
くにたち郷土文化館	国立市谷保6231	042-576-0211	JR南武線「矢川駅」下車徒歩8分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市駅」から西武バス(イオンモール行き)または都営バス(青梅車庫行き、箱根ヶ崎行き)で「八幡神社」下車徒歩2分/多摩モノレール「上北台駅」からちよこバス外回り「郷土博物館入口」下車徒歩2分
パルテノン多摩歴史ミュージアム	多摩市落合2-35	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩5分
東京農工大学科学博物館	小金井市中町2-24-16	042-388-7163	JR中央線「東小金井駅」南口下車徒歩9分
江戸東京たてもの園	小金井市桜町3-7-1	042-388-3300	JR中央線「武蔵小金井駅」北口から西武バス「小金井公園西口」か関東バス「江戸東京たてもの園前」下車
たましん歴史・美術館	国立市中1-9-52	042-574-1360	JR中央線「国立駅」南口前
御岳美術館	青梅市御岳本町1-1	0428-78-8814	JR青梅線「御嶽駅」下車徒歩20分
東京都埋蔵文化財センター	多摩市落合1-14-2	042-373-5296	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩5-7分
集合住宅歴史館(独立行政法人都市再生機構)	八王子市石川町2683-3	042-644-3751	JR八高線「北八王子駅」下車徒歩10分、JR線「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」から宇津木台行きバス「ケンウッド前」下車徒歩5分
多摩六都科学館	西東京市芝久保町5-10-64	042-469-6100	西武新宿線「花小金井駅」、「田無駅」北口からはなバス第4北ルート「多摩六都科学館」下車
国立ハンセン病資料館	東村山市青葉町4-1-13	042-396-2909	西武池袋線「清瀬駅」南口から久米川駅行き・所沢駅行きバス「ハンセン病資料館」下車
コニカミルタサイエンスドーム(八王子市子ども科学館)	八王子市大横町9-13	042-624-3311	JR中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」から西東京バス「戸吹」・「みついで」行き等「サイエンスドーム」下車徒歩2分
八王子市郷土資料館	八王子市上野町33	042-622-8939	JR中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」からバス「市民会館」下車
首都大学東京91年館	八王子市南大沢1-1	042-677-1111	京王線相模原線「南大沢駅」下車徒歩5分
狛江市立古民家園(むいから民家園)	狛江市元和泉2-15-5	03-3489-8981	小田急線「狛江駅」より徒歩10分/小田急線「狛江駅」北口より「多摩川住宅」行バスで「児童公園」下車
武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館	武蔵野市境5-15-5	0422-53-1811	JR中央線・西武多摩川線 武蔵境駅から徒歩12分/ムーバス 境西循環0番「武蔵境駅北口」から4番「武蔵野ふるさと歴史館」下車
帝京大学総合博物館	八王子市大塚359	042-678-3675	多摩モノレール「大塚・帝京大学」駅下車徒歩15分/京王線「聖蹟桜ヶ丘」駅、「高幡不動」駅、「多摩センター」駅より京王バスに乗りし「帝京大学構内」バス停にて下車
国際基督教大学博物館 湯浅八郎記念館	三鷹市大沢3-10-2	0422-33-3340	中央線三鷹駅南口または武蔵境駅南口より小田急バス国際基督教大学行にて終点下車/武蔵境駅からタクシー 10分
町田市民文学館ことばらんど	町田市原町田4-16-17	042-793-3420	JR町田駅から徒歩8分/小田急線町田駅から徒歩12分/神奈川中央交通バス、町田市民バス「原町田四丁目」バス停下車2分

東京都三多摩公立博物館協議会会報  
ミュージアム多摩 No.40

発行日 2019年3月31日

発行 東京都三多摩公立博物館協議会  
2019年度会長 府中市郷土の森博物館  
府中市南町6 - 32 042-368-7921

編集委員 武蔵村山市立歴史民俗資料館 : 内野 昭  
羽村市郷土博物館 : 葛西 志耕  
あきる野市五日市郷土館 : 野々村 めぐみ  
清瀬市郷土博物館 : 東野 豊秋